Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.0 リリースノート

Sun Microsystems, Inc.
4150 Network Circle
Santa Clara, CA 95054
U.S.A.

Part No: 820–0287
2007 年 3 月

はじめに

このリリースノートでは、リリース時点で判明している、重要な情報を示します。ここでは、新機能や拡張機能、既知の制限事項や問題点、技術的な注意事項、その他の関連情報を説明します。Directory Server Enterprise Edition をお使いになる前に、このリリースノートをお読みください。

内容の紹介

このマニュアルは、以下の章で構成されています。

第 1 章互換性の問題では、以前のバージョンのコンポーネント製品との互換性や、Directory Server Enterprise Edition ソフトウェアに対して今後予定されている変更について説明しています。

第 2 章インストールに関する注意点では、ハードウェアおよびソフトウェアの要件など、インストールに関連する事項を扱っています。

第 3 章Directory Server の修正されたバグと既知の問題点では、Directory Server の修正点および問題点の一覧を示しています。

第 4 章Directory Proxy Server の修正されたバグと既知の問題点では、Directory Proxy Server の修正点および問題点の一覧を示しています。

第 5 章Identity Synchronization for Windows の修正されたバグと既知の問題点では、Identity Synchronization for Windows の修正点および問題点の一覧を示しています。

第 6 章Directory Editor の修正されたバグと既知の問題点では、Directory Editor の修正点および問題点の一覧を示しています。

第 7 章Directory Server Resource Kit の修正されたバグと既知の問題点では、Directory Server Resource Kit の概要を紹介しています。この章では、Directory Server Resource Kit の修正点および問題点の一覧も示します。

Directory Server Enterprise Edition マニュアルセット

この Directory Server Enterprise Edition マニュアルセットでは、Sun Java System Directory Server Enterprise Edition を使用してディレクトリサービスを評価、設計、配備、および管理する方法について説明します。Directory Server Enterprise Edition 用の

クライアントアプリケーションを開発する方法も示します。Directory Server Enterprise Edition マニュアルセットは http://docs.sun.com/coll/1224.1 から入手できます。

Directory Server Enterprise Edition について理解を深めるには、次の表に示すドキュメントを順番に参照してください。

表 P–1 Directory Server Enterprise Edition マニュアル

マニュアルタイトル	内容
『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.0 リリースノート』	既知の問題を含め、Directory Server Enterprise Edition についての最新情報を提供しています。
『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.0 Documentation Center 』	マニュアルセットの重要な領域へのリンクを提供しています。
『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.0 Evaluation Guide 』	このリリースの重要な機能を紹介します。これらの機能の仕組みや提供される利点を、単独システムに実装可能な架空の配備のコンテキストに沿って例示します。
『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.0 配備計画ガイド』	Directory Server Enterprise Edition をベースとする、可用性と拡張性に優れたディレクトリサービスを計画および設計する方法について説明します。配備の計画および設計の基本的な概念および原則を提示します。ソリューションのライフサイクルについて検討し、Directory Server Enterprise Edition ベースのソリューションを計画するために使用する概略レベルのサンプルおよび戦略を提供します。
『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.0 Installation Guide 』	Directory Server Enterprise Edition ソフトウェアのインストール方法について説明します。インストールするコンポーネントを選択する方法、インストール後にそれらのコンポーネントを設定する方法、および設定したコンポーネントが正しく機能することを検証する方法を示します。 Directory Editor のインストール手順については、http://docs.sun.com/coll/DirEdit_05q1 を参照してください。 Directory Editor をインストールする前に、『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.0 リリースノート』に記載されている Directory Editor 関連の情報を必ず参照してください。
『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.0 Migration Guide 』	Directory Server、Directory Proxy Server、および Identity Synchronization for Windows の以前のバージョンからコンポーネントをアップグレードする手順を示します。

表 P–1 Directory Server Enterprise Edition マニュアル (続き)

マニュアルタイトル	内容
『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.0 管理ガイド』	Directory Server Enterprise Edition をコマンド行から管理するための手順を示します。 Directory Service Control Center (DSCC) を使用して Directory Server Enterprise Edition を管理する際のヒントおよび手順については、DSCC のオンラインヘルプを参照してください。 Directory Editor の管理手順については、http://docs.sun.com/coll/DirEdit_05q1 を参照してください。 Identity Synchronization for Windows のインストールおよび設定の手順については、『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.0 Installation Guide』のパート II「Installing Identity Synchronization for Windows」を参照してください。
『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.0 Developer's Guide 』	Directory Server Enterprise Edition の一部として提供される API を使用して、サーバープラグインを開発する方法を示します。
『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.0 Reference 』	Directory Server Enterprise Edition の技術および概念の基礎を紹介します。コンポーネント、アーキテクチャー、プロセス、および機能について説明しています。開発者 API への参照も示しています。
『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.0 Man Page Reference 』	Directory Server Enterprise Edition を通じて利用可能なコマンド行ツール、スキーマオブジェクト、およびその他の公開インタフェースについて説明しています。このドキュメントの個別の節を、オンラインマニュアルページとしてインストールすることができます。
『Sun Java System Identity Synchronization for Windows 6.0 Deployment Planning Guide 』	Identity Synchronization for Windows の計画と配備に関する一般的なガイドラインやベストプラクティスを示しています。

関連資料

SLAMD 分散負荷生成エンジン (SLAMD) は、ネットワークベースのアプリケーションを対象に負荷テストを実行し、パフォーマンスを分析するために設計された Java™ アプリケーションです。SLAMD は当初 Sun Microsystems, Inc. によって、LDAP ディレクトリサーバーのパフォーマンスをベンチマークおよび分析する目的で開発されました。SLAMD は、OSI が承認したオープンソースライセンスである Sun Public License のもとでオープンソースアプリケーションとして公開されています。SLAMD についての情報を入手するには、http://www.slamd.com/ を参照してください。SLAMD は java.net プロジェクトとしても公開されています。https://slamd.dev.java.net/ を参照してください。

Java Naming and Directory Interface (JNDI) 技術は、LDAP および DSML v2 を利用した、Java アプリケーションからのディレクトリサーバーへのアクセスをサポートします。JNDI の詳細については、http://java.sun.com/products/jndi/ を参照してください。『JNDI チュートリアル』には、JNDI の使用方法についての詳しい説明およびサンプルを収録しています。このチュートリアルは http://java.sun.com/products/jndi/tutorial/ から入手できます。

Directory Server Enterprise Edition のライセンス形態には、スタンドアロン製品、Sun Java Enterprise System のコンポーネント、Sun Java Identity Management Suite などの Sun 製品群の一部、または Sun からのほかのソフトウェア製品へのアドオンパッケージがあります。Java Enterprise System は、ネットワークまたはインターネット環境で分散配備されるエンタープライズアプリケーションをサポートするソフトウェアインフラストラクチャーです。Directory Server Enterprise Edition が Java Enterprise System のコンポーネントとしてライセンスされる場合、`http://docs.sun.com/coll/1286.2` から入手可能なシステムマニュアルに目を通してください。

Identity Synchronization for Windows は、Message Queue を制限されたライセンスで使用します。Message Queue のマニュアルは `http://docs.sun.com/coll/1307.2` から入手できます。

Identity Synchronization for Windows は、Microsoft Windows のパスワードポリシーを管理するための製品です。

- Windows Server 2003 のパスワードポリシーについての情報は、Microsoft TechNet Web サイトで公開されています。
- Windows Server 2003 でのパスワードの変更やグループポリシーについての情報は、Microsoft TechNet Web サイトで公開されています。
- Microsoft 証明書サービスのエンタープライズルート認証局に関する情報は、Microsoft サポートオンライン Web サイトで公開されています。
- Microsoft システムでの LDAP over SSL の設定に関する情報は、Microsoft サポートオンライン Web サイトで公開されています。

再配布可能なファイル

Directory Server Enterprise Edition では、お客様による再配布が可能なファイルは提供されません。

デフォルトのパスとコマンドの場所

この節では、マニュアルで使用するデフォルトのパスについて説明し、オペレーティングシステムや配備タイプによって異なるコマンドの場所を示します。

デフォルトのパス

次の表では、このドキュメントで使用するデフォルトのパスについて説明します。インストールされるファイルの詳細な説明については、『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.0 Reference』の第 15 章「Directory Server File Reference」、『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.0 Reference』の第 26 章「Directory Proxy Server File Reference」、または『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.0 Reference』の付録 A「Directory Server Resource Kit File Reference」も参照してください。

表 P–2 デフォルトのパス

プレースホルダ	説明	デフォルト値
install-path	Directory Server Enterprise Edition ソフトウェアのベースインストールディレクトリを表します。 ソフトウェアは、このベース *install-path* の下位のディレクトリにインストールされます。たとえば、Directory Server ソフトウェアは *install-path*/ds6/ にインストールされます。	dsee_deploy(1M) を使用して ZIP 形式の配布パッケージからインストールするとき、デフォルトの *install-path* は現在のディレクトリです。*install-path* は、dsee_deploy コマンドの -i オプションを使用して設定できます。 Java Enterprise System インストーラを使用する場合など、ネイティブパッケージ配布からインストールする場合、デフォルトの *install-path* は次のいずれかの場所になります。 ■ Solaris システム - /opt/SUNWdsee/ ■ HP-UX システム - /opt/sun/ ■ Red Hat システム - /opt/sun/ ■ Windows システム - C:\Program Files\Sun\JavaES5\DSEE
instance-path	Directory Server または Directory Proxy Server のインスタンスのフルパスを表します。 このマニュアルでは、Directory Server には /local/ds/ を、Directory Proxy Server には /local/dps/ を使用します。	デフォルトのパスはありません。ただしインスタンスのパスは、常にローカルファイルシステム上に存在します。 推奨されるディレクトリは以下のとおりです。 /var (Solaris システム) /global (Sun Cluster を使用する場合)
serverroot	Identity Synchronization for Windows のインストール先の親ディレクトリを表します	インストールごとに異なります。Directory Server では、*serverroot* の概念が存在しなくなったことに注意してください。
isw-*hostname*	Identity Synchronization for Windows インスタンスのディレクトリを表します	インストールごとに異なります
/*path*/*to*/cert8.db	Identity Synchronization for Windows におけるクライアントの証明書データベースのデフォルトのパスおよびファイル名を表します	*current-working-dir*/cert8.db
serverroot/isw-*hostname*/logs/	システムマネージャー、各コネクタ、および Central Logger のログを Identity Synchronization for Windows がローカルに保存する場所のデフォルトパスを表します	インストールごとに異なります
serverroot/isw-*hostname*/logs/central/	Identity Synchronization for Windows セントラルログのデフォルトパスを表します	インストールごとに異なります

コマンドの場所

以下の表は、Directory Server Enterprise Edition のマニュアルで使用されるコマンドの場所の一覧です。これらの各コマンドの詳細については、それぞれのマニュアルページを参照してください。

表 P–3 コマンドの場所

コマンド	Java ES ネイティブパッケージ配布	ZIP 形式の配布パッケージ
cacaoadm	Solaris - /usr/sbin/cacaoadm	Solaris - *install-path*/dsee6/cacao_2.0/usr/lib/cacao/bin/cacaoadm
	Red Hat、HP-UX - /opt/sun/cacao/bin/cacaoadm	Red Hat、HP-UX - *install-path*/dsee6/cacao_2.0/cacao/bin/cacaoadm
	Windows - *install-path*\share\cacao_2.0\bin\cacaoadm.bat	Windows - *install-path*\dsee6\cacao_2.0\bin\cacaoadm.bat
certutil	Solaris - /usr/sfw/bin/certutil	*install-path*/dsee6/bin/certutil
	Red Hat、HP-UX - /opt/sun/private/bin/certutil	
dpadm(1M)	*install-path*/dps6/bin/dpadm	*install-path*/dps6/bin/dpadm
dpconf(1M)	*install-path*/dps6/bin/dpconf	*install-path*/dps6/bin/dpconf
dsadm(1M)	*install-path*/ds6/bin/dsadm	*install-path*/ds6/bin/dsadm
dsccmon(1M)	*install-path*/dscc6/bin/dsccmon	*install-path*/dscc6/bin/dsccmon
dsccreg(1M)	*install-path*/dscc6/bin/dsccreg	*install-path*/dscc6/bin/dsccreg
dsccsetup(1M)	*install-path*/dscc6/bin/dsccsetup	*install-path*/dscc6/bin/dsccsetup
dsconf(1M)	*install-path*/ds6/bin/dsconf	*install-path*/ds6/bin/dsconf
dsee_deploy(1M)	提供されていません	*install-path*/dsee6/bin/dsee_deploy
dsmig(1M)	*install-path*/ds6/bin/dsmig	*install-path*/ds6/bin/dsmig
entrycmp(1)	*install-path*/ds6/bin/entrycmp	*install-path*/ds6/bin/entrycmp
fildif(1)	*install-path*/ds6/bin/fildif	*install-path*/ds6/bin/fildif
idsktune(1M)	*install-path*/dsrk6/bin/idsktune	*install-path*/dsrk6/bin/idsktune

表 P–3 コマンドの場所 (続き)

コマンド	Java ES ネイティブパッケージ配布	ZIP 形式の配布パッケージ
insync(1)	*install-path*/ds6/bin/insync	*install-path*/ds6/bin/insync
ns-accountstatus(1M)	*install-path*/ds6/bin/ns-accountstatus	*install-path*/ds6/bin/ns-accountstatus
ns-activate(1M)	*install-path*/ds6/bin/ns-activate	*install-path*/ds6/bin/ns-activate
ns-inactivate(1M)	*install-path*/ds6/bin/ns-inactivate	*install-path*/ds6/bin/ns-inactivate
repldisc(1)	*install-path*/ds6/bin/repldisc	*install-path*/ds6/bin/repldisc
schema_push(1M)	*install-path*/ds6/bin/schema_push	*install-path*/ds6/bin/schema_push
smcwebserver	Solaris、Linux、HP-UX - /usr/sbin/smcwebserver	このコマンドは、ZIP 形式の配布パッケージでは提供されない Directory Service Control Center のみに存在します。
	Windows - *install-path*\share\webconsole\bin\smcwebserver	
wcadmin	Solaris、Linux、HP-UX - /usr/sbin/wcadmin	このコマンドは、ZIP 形式の配布パッケージでは提供されない Directory Service Control Center のみに存在します。
	Windows - *install-path*\share\webconsole\bin\wcadmin	

表記上の規則

このマニュアルでは、次のような字体や記号を特別な意味を持つものとして使用します。

表 P–4 表記上の規則

字体または記号	意味	例
AaBbCc123	コマンド名、ファイル名、ディレクトリ名、画面上のコンピュータ出力、コード例を示します。	.login ファイルを編集します。 ls -a を使用してすべてのファイルを表示します。 machine_name% you have mail.
AaBbCc123	ユーザーが入力する文字を、画面上のコンピュータ出力と区別して示します。	machine_name% **su** Password:
aabbcc123	変数を示します。実際に使用する特定の名前または値で置き換えます。	ファイルを削除するには、rm *filename* と入力します。

表 P–4 表記上の規則 (続き)

字体または記号	意味	例
『』	参照する書名を示します。	『コードマネージャー・ユーザーズガイド』を参照してください。
「」	参照する章、節、ボタンやメニュー名、強調する単語を示します。	第 5 章「衝突の回避」を参照してください。 この操作ができるのは、「スーパーユーザー」だけです。
\	枠で囲まれたコード例で、テキストがページ行幅を超える場合に、継続を示します。	`sun% grep '^#define \` `  XV_VERSION_STRING'`

コード例は次のように表示されます。

- C シェル

  ```
  machine_name% command y|n [filename]
  ```

- C シェルのスーパーユーザー

  ```
  machine_name# command y|n [filename]
  ```

- Bourne シェルおよび Korn シェル

  ```
  $ command y|n [filename]
  ```

- Bourne シェルおよび Korn シェルのスーパーユーザー

  ```
  # command y|n [filename]
  ```

[ ] は省略可能な項目を示します。上記の例は、*filename* は省略してもよいことを示しています。

| は区切り文字 (セパレータ) です。この文字で分割されている引数のうち 1 つだけを指定します。

キーボードのキー名は英文で、頭文字を大文字で示します (例: Shift キーを押します)。ただし、キーボードによっては Enter キーが Return キーの動作をします。

ダッシュ (-) は 2 つのキーを同時に押すことを示します。たとえば、Ctrl-D は Control キーを押したまま D キーを押すことを意味します。

コマンド例のシェルプロンプト

次の表は、デフォルトのシステムプロンプトおよびスーパーユーザープロンプトを示しています。

表 P–5 シェルプロンプトについて

シェル	プロンプト
UNIX および Linux システムの C シェル	`machine_name%`
UNIX および Linux システムの C シェルのスーパーユーザー	`machine_name#`
UNIX および Linux システムの Bourne シェルおよび Korn シェル	`$`
UNIX および Linux システムの Bourne シェルおよび Korn シェルのスーパーユーザー	`#`
Microsoft Windows のコマンド行	`C:\`

記号の表記ルール

この表は、このマニュアルで使用される記号について説明したものです。

表 P–6 記号の表記ルール

記号	説明	例	意味
`[ ]`	省略可能な引数やコマンドオプションが含まれます。	`ls [-l]`	`-l` オプションは必須ではありません。
`{ | }`	必須コマンドオプションの選択項目が含まれています。	`-d {y|n}`	`-d` オプションには、`y` 引数または `n` 引数のいずれかを使用する必要があります。
`${ }`	変数参照を示します。	`${com.sun.javaRoot}`	`com.sun.javaRoot` 変数の値を参照します。
-	同時に実行する複数のキーストロークを結び付けます。	Control-A	コントロールキーを押しながら A キーを押します。
+	連続で複数のキーストロークを行います。	Ctrl + A + N	Control キーを押して離してから、次のキーを押します。
→	グラフィカルユーザーインタフェースでのメニュー項目の選択を示します。	「ファイル」→「新規」→「テンプレート」	「ファイル」メニューから「新規」を選択します。「新規」サブメニューから、「テンプレート」を選択します。

マニュアル、サポート、およびトレーニング

Sun のサービス	URL	内容
マニュアル	http://jp.sun.com/documentation/	PDF 文書および HTML 文書をダウンロードできます。
サポートおよびトレーニング	http://jp.sun.com/supportraining/	技術サポート、パッチのダウンロード、および Sun のトレーニングコース情報を提供します。

◆ ◆ ◆ 第 1 章

1 互換性の問題

この章では、Directory Server Enterprise Edition コンポーネント製品から削除されたか、または非推奨となった機能について説明します。また、Directory Server Enterprise Edition コンポーネント製品の機能のうち、削除される可能性がある機能と非推奨となる可能性がある機能についても説明します。

この章で説明する内容は、次のとおりです。

インタフェースの安定性分類についての情報は、『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.0 Man Page Reference』において、マニュアルページのエントリごとに提供されています。

プラットフォームのサポート

Directory Server Enterprise Edition の将来のリリースでは、Red Hat 2.1、Windows 2000、および J2SE プラットフォーム 1.4 のサポートは削除される可能性があります。それに備えるために、Red Hat、Windows、および Java SE プラットフォームのより新しいバージョンへの移行を計画し始めてください。

システムの仮想化のサポート

システムの仮想化は、複数のオペレーティングシステム (OS) インスタンスを共用ハードウェア上で個別に実行できるようにするテクノロジです。機能的にいうと、仮想化された環境でホストされる OS に配備されたソフトウェアは、通常はベースとなるプラットフォームが仮想化されていることを認識しません。Sun では、精選されたシステムの仮想化と OS の組み合わせについて、その Sun Java System 製品のテスト

を行っています。これは、Sun Java System 製品が、適切な規模と構成の仮想化された環境で、仮想化されていないシステム上の場合と同様に引き続き機能することを実証するためのテストです。仮想化された環境での Sun Java System 製品に対する Sun のサポートの詳細は、http://docs.sun.com/doc/820-4651 を参照してください。

管理サーバーとコンソール

Identity Synchronization for Windows のリモートグラフィカル管理に現在使用されている管理サーバーおよび Java Swing ベースのコンソールは、置き換えられる可能性があります。サービスの管理をすべてブラウザベースで実行して、ファイアウォール経由のアクセスを簡単に設定できるように、Directory Service Control Center が実装されました。

注 – Directory Proxy Server および Directory Server ではすでに Directory Service Control Center が利用されています。*Directory Proxy Server* および *Directory Server* では、従来のサーバールートアーキテクチャーに代わって新しい管理フレームワークが利用されるようになっています。

そのため、Identity Synchronization for Windows でも、次のコマンドは将来のリリースで除外される可能性があります。

- `start-admin`
- `stop-admin`
- `startconsole`

さらに、`o=NetscapeRoot` 内のすべてが変更される可能性があります。具体的には、`o=NetscapeRoot` が今後存在しなくなる可能性があります。サーバールートアーキテクチャーは、新しい管理フレームワークによって置き換えられる可能性があります。

また、Directory Service Control Center を使用して Directory Server 連鎖を設定することはできません。

Directory Proxy Server の変更点

以前の構成から Directory Proxy Server 6.0 への自動移行パスは存在しません。代わりの移行手段の詳細は、『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.0 Migration Guide』の第 6 章「Migrating Directory Proxy Server」を参照してください。

Directory Server の変更点

Directory Server インスタンスの管理に利用されてきた、従来のコマンド行ツールが非推奨となっています。

次のツールは、すでに削除されています。

- `db2index`
- `directoryserver`
- `monitor`
- `suffix2instance`
- `vlvindex`

次のツールは将来のリリースから削除される可能性があります。

- `bak2db`
- `db2bak`
- `db2ldif`
- `ldif2db`
- `restart-slapd`
- `start-slapd`
- `stop-slapd`

これらのツールによって提供されていた機能は、新しいコマンド行ツールの `dsadm` および `dsconf` や、その他のコマンドによって置き換えられます。詳細については、『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.0 Migration Guide』の「Command Line Changes」を参照してください。

Directory Server の変更点に関連して管理作業が受ける影響の詳細については、『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.0 Migration Guide』の第 5 章「Architectural Changes in Directory Server 6.0」を参照してください。

レプリケートされたサーバートポロジを移行する前に、『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.0 Migration Guide』の第 4 章「Migrating a Replicated Topology」を確認してください。Directory Server 4 を使用した旧バージョンのレプリケーションのサポートは、このリリースから削除されました。Sun Microsystems は、Directory Server 4 のサポートを 2004 年 1 月に終了しました。

Directory Server インスタンスを作成するとき、パスワードポリシーは初期状態で下位互換に設定されます。アップグレード後、より柔軟できめ細かなパスワードポリシー構成を可能にするために、互換性モードを変更します。ポリシーの変換は Directory Server によって管理されます。下位互換のパスワードポリシー設定は、将来のリリースで削除される可能性があります。

また、Directory Server インスタンスを作成する場合、DN 変更操作のサポートは無効化されています。レプリケーショントポロジ内のすべてのサーバーインスタンスをアップグレードしたあと、DN 変更操作を正常にレプリケートできます。その時点で、各サーバーインスタンスで DN 変更操作のサポートを有効にすることができます。この目的には、`dsconf set-server-prop moddn-enabled:on` コマンドを使用します。

Directory Server 連鎖は非推奨になっており、将来のリリースでは削除される可能性があります。連鎖は Directory Service Control Center では設定できず、また新しいコマンド行ツールでも設定できません。連鎖によって有効化された配備の大部分は現在、Directory Proxy Server の機能を使用して有効化されます。たとえば、データ配布、レプリケーショントポロジ全体にわたるグローバルアカウントのロックアウト、およびディレクトリ情報ツリーのマージは、Directory Proxy Server を使用して実行できます。連鎖に引き続き依存している旧バージョンのアプリケーションの場合は、`ldapmodify` コマンドを使用して連鎖サフィックスプラグインを設定することにより、連鎖の属性を設定できます。これらの属性は、`dse.ldif`(4)に示されています。

『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.0 Developer's Guide』の第 2 章「Changes to the Plug-In API Since Directory Server 5.2」および『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.0 Developer's Guide』の第 3 章「Changes to the Plug-In API From Directory Server 4 to Directory Server 5.2」では、プラグイン API の変更点について詳しく説明しています。これらの参照先で非推奨であることが示されているインタフェースは、将来のリリースで削除される可能性があります。

Directory Server Resource Kit の変更点

83 ページの「Directory Server Resource Kit について」では、このリリースの Directory Server Resource Kit における修正点や既知の問題点について説明しています。

LDAP ユーティリティーに関する Sun Solaris システムのマニュアルページでは、Directory Server Enterprise Edition で提供されるバージョンの LDAP ユーティリティー `ldapsearch`、`ldapmodify`、`ldapdelete`、および `ldapadd` についての記述がありません。これらのコマンドは、Solaris システムで別々には提供されなくなり、代わりに将来のバージョンのオペレーティングシステムで提供されるコマンドに統合される可能性があります。LDAP クライアントツールについてのマニュアルページは、『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.0 Man Page Reference』を参照してください。

Identity Synchronization for Windows の変更点

このバージョンでは、製品に対し次の変更が行われています。

Identity Synchronization for Windows の将来のリリースでは、Microsoft Windows NT のすべてのバージョンおよび Service Pack のサポートが廃止される可能性があります。Microsoft は Windows NT のサポートを 2004 年 6 月で終了しています。

Identity Synchronization for Windows にアップグレードする前に、『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.0 Migration Guide』の第 7 章「Migrating Identity Synchronization for Windows」をお読みください。

◆ ◆ ◆ 第 2 章

2 インストールに関する注意点

この章では、Directory Server Enterprise Edition ソフトウェアをダウンロードする場所と、主なインストール要件について示します。

この章で説明する内容は、次のとおりです。

ソフトウェアの入手

Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.0 ソフトウェアは、次の場所からダウンロードできます。

`http://www.sun.com/software/products/directory_srvr_ee/get.jsp`

このダウンロードページは、ダウンロードする必要のある配布の種類に応じて、適切なダウンロードに案内する開始点として機能します。Directory Server Enterprise Edition 6.0 は、次の配布形態で入手できます。

- *Sun Java Identity Management Suite* 配布には、Sun Java Enterprise System の一部として提供されるネイティブパッケージ配布が含まれています。Java Enterprise System 配布には、Directory Service Control Center が含まれています。
- *ZIP* 形式の配布パッケージは、ネイティブパッケージには基づいていません。ZIP 形式の配布パッケージに Directory Service Control Center は含まれていません。

この 2 つの配布の比較については、『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.0 Installation Guide』の「Directory Server Enterprise Edition Software Distributions」を参照してください。

ハードウェア要件

この節では、Directory Server Enterprise Edition コンポーネント製品のハードウェア要件を示します。

Directory Proxy Server のハードウェア要件

Directory Proxy Server ソフトウェアの動作には、次のハードウェアサポートが必要です。

コンポーネント	プラットフォームの要件
RAM	1 ～ 2G バイト (評価目的の場合) 4G バイト (本稼働サーバーの場合)
ローカルディスク容量	バイナリ用に 300M バイトのディスク容量。UNIX® システムの場合、ネイティブパッケージからインストールされるバイナリはデフォルトで `/opt` に配置されます。 評価目的の場合、デフォルト構成の使用時において、サーバーログを保持するための追加ディスク容量を 1 サーバーインスタンスにつき 2G バイト確保する必要があります。 Directory Proxy Server では、NFS マウントされたファイルシステムへのインストールはサポートされていません。ローカルファイルシステム上の `/var/opt` 内や `/local` 内などの領域に、サーバーインスタンスとそのインスタンスによって使用されるすべてのファイルを収容できる十分な容量を確保する必要があります。

Directory Server のハードウェア要件

Directory Server ソフトウェアの動作には、次のハードウェアサポートが必要です。

コンポーネント	プラットフォームの要件
RAM	1 ～ 2G バイト (評価目的の場合) 最低 4G バイト以上 (本稼働サーバーの場合)

コンポーネント	プラットフォームの要件
ローカルディスク容量	バイナリ用に 300M バイトのディスク容量。UNIX システムの場合、ネイティブパッケージからインストールされるバイナリはデフォルトで /opt に配置されます。評価目的の場合、サーバーソフトウェア用にさらに 2G バイトのディスク容量を用意する必要があります。 Directory Server を使用している場合、Directory Server に格納されるエントリがローカルディスク領域を使用することを考慮してください。Directory Server では、NFS マウントされたファイルシステム上にインストールされるログおよびデータベースはサポートされていません。ローカルファイルシステム上の /var/opt 内や /local 内などの領域に、データベースを収容するための十分な容量を確保する必要があります。一例として、最大で 250,000 個のエントリが存在し、写真などのバイナリ属性がない一般的な本稼働配備で、4G バイトがこの容量の目安となります。

Identity Synchronization for Windows のハードウェア要件

Identity Synchronization for Windows ソフトウェアの動作には、次のハードウェアサポートが必要です。

コンポーネント	プラットフォームの要件
RAM	コンポーネントがインストールされるすべての場所に 512M バイト (評価目的の場合)。より多くの RAM を搭載したハードウェアを推奨します。
ローカルディスク容量	400M バイトのディスク容量 (最小構成、Directory Server との同時インストール時)。

Directory Editor のハードウェア要件

Directory Editor をインストールする前に、このリリースノートの第 6 章Directory Editor の修正されたバグと既知の問題点を必ず参照してください。

また、詳細については Directory Editor のマニュアル (http://docs.sun.com/coll/DirEdit_05q1) を参照してください。

オペレーティングシステム要件

この節では、Directory Server Enterprise Edition コンポーネント製品をサポートするために必要なオペレーティングシステム、パッチ、およびサービスパックを示します。

Directory Server、Directory Proxy Server、および Directory Server Resource Kit のオペレーティングシステム要件

Directory Server、Directory Proxy Server、および Directory Server Resource Kit (Directory SDK for C と Directory SDK for Java を含む) のオペレーティングシステム要件は共通で

す。これらのソフトウェアコンポーネントは、次の表に示されているバージョンの各種オペレーティングシステム上で動作します。一部のオペレーティングシステムでは、次の表に示されている追加のサービスパックまたはパッチが必要な場合があります。

オペレーティングシステム	サポートされる OS バージョン	必要な追加ソフトウェア
Solaris™ オペレーティングシステム	Solaris 10 オペレーティングシステム (SPARC®、x86、および AMD x64 アーキテクチャー)	パッチ: ■ (SPARC) 118833、119689、119963、および 122032 または置換パッチ ■ (x86/x64) 118855、119964、121208、および 122033 または置換パッチ
	Solaris 9 オペレーティングシステム (SPARC、x86、および AMD x64 アーキテクチャー)	パッチ: ■ (SPARC) 111711、111712、111722、112874、112963、113225、114344、114370、114371、114372、および 114373 または置換パッチ ■ (x86/x64) 111713、111728、113986、114345、114427、114428、114429、114430、114432、116545、および 117172 または置換パッチ
HP-UX	HP-UX 11.11 (PA-RISC 2.0)	パッチ: ■ `PHSS_30966` ■ `PHCO_29328` ■ `PHKL_25842` TOUR 3.1 depots

Red Hat Linux
(64 ビット Red Hat システムでは、Directory Server は 32 ビットモードで動作する)
	Red Hat Advanced Server 3.0 U4 (x86 および AMD x64)
	Red Hat Advanced Server 4.0 U2 (x86 および AMD x64)
		追加のソフトウェアは必要ありません。
		次の互換性ライブラリを推奨:
		`compat-gcc-32-3.2.3-47.3.i386.rpm`
		`compat-gcc-32-c++-3.2.3-47.3.i386.rpm`
		次の互換性ライブラリが必要:
		`compat-libstdc++-33-3.2.3-47.3.rpm`
		64 ビットシステム上で Red Hat を実行している場合でも 32 ビットシステムライブラリをインストールします。

オペレーティングシステム	サポートされる OS バージョン	必要な追加ソフトウェア
Microsoft Windows (64 ビット Windows システムでは、Directory Server は 32 ビットモードで動作する)	Windows 2000 Server	Service Pack 4
	Windows 2000 Advanced Server	Service Pack 4
	Windows Server 2003 Standard Edition	Service Pack 1
	Windows Server 2003 Enterprise Edition	Service Pack 1

Solaris パッチクラスタを入手すると、ほとんどの個別パッチのダウンロードを回避できます。Solaris パッチクラスタを入手するには、次の手順に従います。

1. `http://sunsolve.sun.com/pub-cgi/show.pl?target=patchpage` の SunSolve パッチページにアクセスします。
2. 「推奨パッチクラスタ」リンクをクリックします。
3. お使いの Solaris OS と Java ES バージョンに対応するパッチクラスタをダウンロードします。

Directory Server Enterprise Edition ソフトウェアの動作確認は、一覧中のオペレーティングシステムの「ベース」または「コア」と呼ばれる限定構成ではなく完全インストールを使用して実施しています。

64 ビットモードの Directory Server は、Solaris SPARC、Solaris 10 AMD x64 システム、および HP-UX PA-RISC システム上で動作します。32 ビットモードの Directory Server は、Solaris x86 システム、Solaris 9 AMD x64 システム、Red Hat システム、および Windows システム上で動作します。

Identity Synchronization for Windows のオペレーティングシステム要件

Identity Synchronization for Windows コンポーネントは、次の表に示すバージョンの各種オペレーティングシステム上で動作します。一部のオペレーティングシステムでは、次の表に示されている追加のサービスパックまたはパッチが必要な場合があります。

コアコンポーネントとコネクタに対する Identity Synchronization for Windows の要件

次の表は、Directory Server および Active Directory のコアコンポーネントとコネクタに対するオペレーティングシステムの要件を示しています。

オペレーティングシステム	サポートされる OS バージョン	必要な追加ソフトウェア
Solaris オペレーティングシステム	Solaris 10 オペレーティングシステム (UltraSPARC® および x86 (Pentium) アーキテクチャー)	追加のソフトウェアは必要ありません。
	Solaris 9 オペレーティングシステム (SPARC アーキテクチャー)	追加のソフトウェアは必要ありません。
	Solaris 8 オペレーティングシステム (UltraSPARC アーキテクチャー)	追加のソフトウェアは必要ありません。
Red Hat Linux	Red Hat Advanced Server 3.0	追加のソフトウェアは必要ありません。
Microsoft Windows	Windows 2000 Server	Service Pack 4
	Windows 2000 Advanced Server	Service Pack 4
	Windows Server 2003 Standard Edition	最新のセキュリティー更新の適用
	Windows Server 2003 Enterprise Edition	最新のセキュリティー更新の適用

Windows NT に対する Identity Synchronization for Windows の要件

次の表は、Windows NT のコンポーネントとコネクタに対するオペレーティングシステムの要件を示しています。

オペレーティングシステム	サポートされる OS バージョン	必要な追加ソフトウェア
Microsoft Windows	Windows NT Server 4.0 プライマリドメインコントローラ (x86 アーキテクチャー)	Service Pack 6a

Directory Editor のオペレーティングシステム要件

Directory Editor をインストールする前に、このリリースノートの第 6 章Directory Editor の修正されたバグと既知の問題点を必ず参照してください。

また、詳細については Directory Editor のマニュアル (`http://docs.sun.com/coll/DirEdit_05q1`) を参照してください。

ソフトウェア依存関係の要件

Directory Server は、暗号化アルゴリズムを Network Security Services (NSS) レイヤーに依存します。NSS は、Solaris 10 システムで提供され、暗号化促進デバイスをサポートする Sun 暗号化フレームワークとの組み合わせで正しく機能することが確認されています。

Windows システムでは、アカウントのアクティブ化や手動のスキーマレプリケーションのコマンドを使用するには、Directory Server に ActivePerl ソフトウェアが必要です。ActivePerl は Directory Server Enterprise Edition には付属しません。この依存関係は、次のコマンドに影響します。

- `ns-accountstatus`(1M)
- `ns-activate`(1M)
- `ns-inactivate`(1M)
- `schema_push`(1M)

Directory Proxy Server には、Solaris、Red Hat、および Windows システムではバージョン 1.5.0_09 以上の、また HP-UX システムではバージョン 1.5.0_03 以上の Java Runtime Environment (JRE) が必要です。JRE は ZIP 形式の配布パッケージからインストールされます。`JAVA_HOME` 環境変数セットを使用して ZIP 形式の配布パッケージからインストールする場合は、`JAVA_HOME` で指定された Java Runtime Environment が使用されます。お使いの環境に `JAVA_HOME` が設定されている場合は、最新版であることを必ず確認してください。

Directory Proxy Server は、ソフトウェアに付属のドライバを使用して、次の JDBC データソースで検証されています。

- DB2 9。
- JavaDB 10.1.3.1。
- MySQL 5.0。

  JDBC データビューを作成するために Directory Proxy Server 経由で MySQL データソースにアクセスする場合、バージョン 5.0.4 以上の MySQL JDBC ドライバが Directory Proxy Server に必要です。
- Oracle 9i Database。

Windows システムでは、MKS シェルから `dsee_deploy` コマンドを実行した場合、Common Agent Container (`cacao`) にソフトウェアを正しく登録できません。この問題は、MKS の `PATH` に *system-drive*`:\system32` フォルダが含まれていない場合に発生することがあります。別の方法として、Windows のネイティブなコマンド行でコマンドを実行してください。

『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.0 Installation Guide』のパート II「Installing Identity Synchronization for Windows」には Directory Server 6.0 のサポートしか記載されていませんが、Identity Synchronization for Windows ディレクトリサーバーのコネクタは Directory Server 5.2 Patch 5 をサポートしています。

Identity Synchronization for Windows をインストールする前に、JRE や Message Queue を含め、前提条件の Sun Java System ソフトウェアコンポーネントをインストールする必要があります。

- Identity Synchronization for Windows には JRE は付属しません。

  Identity Synchronization for Windows インストーラの動作には J2SE または JRE 1.5.0_09 が必要です。

  Windows NT 上での Identity Synchronization for Windows の動作には JRE 1.5.0_09 が必要です。

- このリリースの Identity Synchronization for Windows には Message Queue 3.6 がバンドルされています。

  Identity Synchronization for Windows をインストールする場合は、使用するバージョンの Message Queue へのパスを指定する必要があります。それにより、Identity Synchronization for Windows インストールプログラムは、Identity Synchronization for Windows が Message Queue を使用して同期できるように、必要なブローカを Message Queue にインストールします。

  Windows システムでは、*Identity Synchronization for Windows* は *Message Queue 3.6* のみをサポートしています。 そのため、Identity Synchronization for Windows にバンドルされている Message Queue 3.6 をインストールしてください。

  ただし、Message Queue 3.7 は Java Enterprise System 共有コンポーネントとしてインストールされます。そのため、結果として Windows システム上で、Message Queue 3.6 と Message Queue 3.7 の両方がインストールされる可能性があります。Java Enterprise System コンポーネントを Identity Synchronization for Windows とともに Windows システムにインストールする場合は、Message Queue 3.7 を選択しないようにしてください。

Windows システムでは、コンソールおよび管理サーバー とともにインストールされた JRE には、夏時間の変更に対する修正が含まれていません。インストールのあと、夏時間の変更に対する修正を適用する必要があります。JRE を修正するには、`http://java.sun.com/javase/tzupdater_README.html` で説明されている `tzupdater` ツールを使用します。修正対象の JRE は、インストール後、コンソールと管理サーバーをインストールした場所の *ServerRoot*`/bin/base/jre/` に格納されます。

Identity Synchronization for Windows はファイアウォール環境での実行が可能です。次の各節では、ファイアウォールを通して公開する必要があるサーバーポートの一覧を示しています。

- 25 ページの「ファイアウォール環境での Identity Synchronization for Windows Message Queue の要件」
- 25 ページの「ファイアウォール環境での Identity Synchronization for Windows インストーラの要件」
- 25 ページの「ファイアウォール環境での Identity Synchronization for Windows コアコンポーネントの要件」

- 25 ページの「ファイアウォール環境での Identity Synchronization for Windows コンソールの要件」
- 26 ページの「ファイアウォール環境での Identity Synchronization for Windows コネクタの要件」
- 26 ページの「ファイアウォール環境での Identity Synchronization for Windows Directory Server プラグインの要件」

ファイアウォール環境での Identity Synchronization for Windows Message Queue の要件

Message Queue はデフォルトで、そのポートマッパーを除くすべてのサービスに対して動的ポートを使用します。ファイアウォールを通して Message Queue ブローカにアクセスする場合、すべてのサービスに対して固定ポートを使用するようにブローカを設定してください。

コアのインストール後、ブローカの設定プロパティー `imq.<service_name>.<protocol_type>.port` を設定する必要があります。特に、`imq.ssljms.tls.port` オプションを設定する必要があります。詳細については、Message Queue のマニュアルを参照してください。

ファイアウォール環境での Identity Synchronization for Windows インストーラの要件

Identity Synchronization for Windows インストーラは、設定ディレクトリとして機能している Directory Server と通信できる必要があります。

- Active Directory コネクタをインストールする場合、インストーラが Active Directory の LDAP ポート (389) と通信できる必要があります。
- Directory Server コネクタまたは Directory Server プラグイン (サブコンポーネント) をインストールする場合、インストーラが Directory Server の LDAP ポート (デフォルトで 389) と通信できる必要があります。

ファイアウォール環境での Identity Synchronization for Windows コアコンポーネントの要件

Message Queue、システムマネージャー、およびコマンド行インタフェースが、Identity Synchronization for Windows の設定が保存された Directory Server と通信できる必要があります。

ファイアウォール環境での Identity Synchronization for Windows コンソールの要件

Identity Synchronization for Windows コンソールが、次に示すコンポーネントと通信できる必要があります。

- Active Directory (LDAP 経由の場合ポート 389、LDAPS 経由の場合ポート 636)
- Active Directory グローバルカタログ (LDAP 経由の場合ポート 3268、LDAPS 経由の場合ポート 3269)
- 各 Directory Server (LDAP または LDAPS 経由)
- 管理サーバー

- Message Queue

ファイアウォール環境での Identity Synchronization for Windows コネクタの要件

すべてのコネクタが Message Queue と通信できる必要があります。

加えて、コネクタに関する次の要件が満たされている必要があります。

- Active Directory コネクタが、LDAP 経由 (ポート 389) または LDAPS 経由 (ポート 636) で Active Directory ドメイン コントローラにアクセスできる必要があります。
- Directory Server コネクタが、LDAP 経由 (デフォルトポート 389) または LDAPS 経由 (デフォルトポート 636) で Directory Server インスタンスにアクセスできる必要があります。

ファイアウォール環境での Identity Synchronization for Windows Directory Server プラグインの要件

各 Directory Server プラグインが、Directory Server コネクタのサーバーポート (コネクタのインストール時に選択したもの) と通信できる必要があります。Directory Server マスターレプリカで動作するプラグインは、Active Directory の LDAP ポート (389) または LDAPS ポート (636) に接続できる必要があります。その他の Directory Server レプリカで動作するプラグインは、マスター Directory Server の LDAP ポートおよび LDAPS ポートと通信できる必要があります。

インストールに必要な特権と資格

この節では、Directory Server Enterprise Edition コンポーネント製品のインストールに必要な特権および資格について説明します。

- 26 ページの「Directory Server、Directory Proxy Server、Directory Service Control Center、および Directory Server Resource Kit のインストールに必要な特権」
- 27 ページの「Identity Synchronization for Windows のインストールに必要な特権と資格」

Directory Server、Directory Proxy Server、Directory Service Control Center、および Directory Server Resource Kit のインストールに必要な特権

Java Enterprise System ネイティブパッケージベースの配布から Directory Server、Directory Proxy Server、または Directory Service Control Center をインストールするには、次の特権が必要です。

- Solaris および Red Hat システムでは、`root` 特権でインストールを行う必要があります。
- Windows システムでは、`Administrator` 特権でインストールを行う必要があります。

ZIP 形式の配布パッケージから Directory Server、Directory Proxy Server、および Directory Server Resource Kit をインストールする場合には、特別な特権は必要ありません。

詳細については、『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.0 Installation Guide』の「Directory Server Enterprise Edition Software Distributions」を参照してください。

Identity Synchronization for Windows のインストールに必要な特権と資格

Identity Synchronization for Windows をインストールするには、次のコンポーネントに対する資格情報を用意する必要があります。

- 設定 Directory Server。
- 同期対象の Directory Server。
- Active Directory。

  詳細については、『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.0 Installation Guide』の「Installing Core」を参照してください。

加えて、Identity Synchronization for Windows をインストールするには次の特権が必要です。

- Solaris および Red Hat システムでは、`root` 特権でインストールを行う必要があります。
- Windows システムでは、`Administrator` 特権でインストールを行う必要があります。

注 – テキストベースのインストーラを使用してパスワードを入力するとき、パスワードはプログラムによって自動的にマスクされ、そのまま画面に表示されることはありません。テキストベースのインストーラは Solaris および Red Hat システムでのみサポートされています。

Identity Synchronization for Windows のインストールに関する注意事項

Identity Synchronization for Windows を新規インストールする前に、必ず『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.0 Installation Guide』の第 4 章「Preparing for Installation」をお読みください。

Identity Synchronization for Windows でアカウントのロックアウトを有効化する

アカウントのロックアウト機能を有効にするには、Directory Server と Active Directory の間で異なっている一部の属性をマップする必要があります。アカウントのロックアウトは有効にする必要があります。Active Directory と Directory Server の両方で、パスワードポリシーを同じにする必要があります。この設定により、ロックアウトおよびロックアウト解除のイベントが、Active Directory と Directory Server の間で双方向的に行き来できるようになります。

Identity Synchronization for Windows では、Active Directory と Directory Server の間で次のイベント同期を行うことができます。

- ロックアウトイベントの同期 (Active Directory から Directory Server へ)
- ロックアウトイベントの同期 (Directory Server から Active Directory へ)
- 手動でのロックアウト解除イベントの同期 (Active Directory から Directory Server へ)
- 手動でのロックアウト解除イベントの同期 (Directory Server から Active Directory へ)

アカウントのロックアウトに必要な前提条件

アカウントのロックアウト機能を有効にする前に、両方のコンポーネントで属性 `lockoutDuration` を同じ値に設定してください。また、分散セットアップに関係するすべてのシステム間で時刻が一致していることも確認してください。時刻が一致していないと、`lockoutDuration` の設定がシステム間の時刻差よりも短い場合に、ロックアウトイベントが期限切れとなる可能性があります。

アカウントのロックアウト機能の使用

アカウントのロックアウトの同期を有効にするには、Directory Server の 属性 `accountUnlockTime` と Active Directory の属性 `lockoutTime` の間でマッピングを行う必要があります。`accountUnlockTime` は、`passwordObject` オブジェクトクラスを使用してスキーマをロードしたあとで、コンソールで選択可能になります。

アカウントのロックアウト機能を使用するための要件

アカウントのロックアウトポリシーを、Active Directory データソースと Directory Server データソースの両方で同様に設定してください。

- アカウントのロックアウト継続時間を、Active Directory データソースと Directory Server データソースの両方で同じ値に設定してください。
- Active Directory データソースの `LockoutTime` を、Directory Server データソースの `AccountUnLockoutTime` にマップする必要があります。

インストールの詳細については、ソフトウェアに付属の README を参照してください。

Windows Server 2003 での Identity Synchronization for Windows の使用

Windows Server 2003 では、デフォルトのパスワードポリシーで強力なパスワードが要求されますが、これは Windows 2000 におけるデフォルトのパスワードポリシーと異なります。

◆ ◆ ◆ 第 3 章

Directory Server の修正されたバグと既知の問題点

この章では、Directory Server のリリース時点で判明している、製品固有の重要な情報を示します。

この章で説明する内容は、次のとおりです。

Directory Server で修正されたバグ

この節では、このリリースで修正されたバグの一覧を示します。

次のバグが、Directory Server の前回のリリース以降に修正されました。

2065190 `;binary` 属性および RFC 1274 への準拠に関する問題。

2073877 ユーザーの追加時に、コンソールプロセスが増大する。

2077615 フィルタが使用されていると、60M バイトより大きいアクセスログをコンソールに表示できない。

2078936 2G バイトを超えるログサイズの設定が機能しない。

2081711 クライアントが発行者 DN のない証明書を送信すると、Directory Server がクラッシュする。

2096858 エントリを追加すると、Directory Server がクラッシュする。

2096883 プラグインによって実行された正しくない検索のために、Directory Server がコアダンプする。

2096891 アクセス制御プラグインのデッドロック。

2096903 同じサフィックスを含む URL を使用してパススルー認証を設定できない。

2096910 Directory Server によって DN チェック操作が正常に実行されない。

2096948 リフェラルの無視に関連したリグレッションバグ。

2096972 連鎖データベースに対する `ldapsearch -A` が失敗する。

2096974 シャットダウン中、参照整合性プラグインによって Directory Server がクラッシュする場合がある。

2097033 VLV インデックスが破壊される。

2097063 証明書認証とのバインドや単純バインドによって Directory Server がハングアップする場合がある。

2097069 レプリケートされた更新によってレプリケーションが停止する場合がある。

2097104 ブラウズインデックスの削除中にクラッシュする。

2097113 サブツリープラグインが、postoperation に関する警告を必要以上にログに記録してしまう。

2097137 参照整合性プラグインによって内部検索のための十分な領域が割り当てられない。

2097199 パスワードの有効期限が切れたユーザーによるバインド操作が一部できてしまう。

2097204 起動時に、未知のリバース DNS 要求が発行される。

2097230 インデックスからすべての属性サブタイプが削除される。

2097291 `acl_access_allowed()` で Directory Server がコアダンプする。

2097364 1 文字の属性値を使用すると、ワイルドカード検索が十分に機能しない。

2097365 一部のワイルドカード検索で問題が発生する。

2097370 `ldif2db -n userRoot -i test.ldif` でバスエラーが発生する。

2097382 ACI と ACL で、余分な空白が考慮されない。

2097440 持続検索でメモリーリークが発生する。

2097454 平文パスワードの履歴の確認時に Directory Server がコアダンプする。

2097508 持続検索の結果、objectclass に nsTombstone を含むエントリが返される。

2097539 Start TLS がスレッドに対して安全でない。

2097566 入れ子のディレクトリデータベースで `bak2db` が失敗する。

2097599 `re_comp()` でバッファーオーバーフローが発生する。

2097622 重大なメモリーリーク。

2097653 属性一意性プラグインがアクティブなときに、`preop_modify()` で Directory Server がコアダンプする。

2097856 無効な PDU を受信すると Directory Server がクラッシュする。

2098089 ある属性に対して、似たような値が複数設定されている場合に、そのうちの 1 つが削除されると、部分文字列インデックスが壊れてしまう。

2099319 HP-UX でインストールが失敗する。

2099405 レプリケーションのコマンドにタイムアウトパラメータが含まれているべきである。

2099420 旧バージョン形式の更新履歴ログのトリミング中にクラッシュする。

2099426 暗号化を実行すると、重複した `uid` 属性値が生成される。

2099434 `db2ldif -r` によってガーディアンファイルが削除される。

2101109 監査ログが設定されたとおりにローテーションしない場合がある。

2101130 再起動時に、アクセスログのローテーションが発生しない。

2101137 一部の Tombstone エントリがパージされていない。

2101144 レプリカエラーのためにリフェラルを設定できない。

2101156 リンクが 5 分以上ダウンしたあと、コンシューマの ID を解放できない。

2101162 空のコンテナにおける VLV 検索で `err=1` が返される。

2101166 リフェラルサブサフィックスを含むサフィックスに関する検索でメモリーリークが発生する。

2101187 DN フィールドに「*」文字を含むエントリを追加すると、フルスキャンの際に、削除エントリ (tombstone) までスキャンするため、パフォーマンスの問題を招いてしまう。

2101191 同じホスト上に複数のインスタンスが存在すると、`repldisc` が正しく機能しない。

2101202 5 つを超える値を変更または削除すると、すべての値が削除される。

2101217 複数の Solaris 9 x86 マスターを使用しているとき、RUV の削除中にクラッシュする。

2101232 DENY マクロ ACI が、影響されるべきではないエントリに適用される。

2101246 最小ディスク空き容量に対するログ設定が、期待どおりに機能しない。

2101260 含んでいる属性が多すぎる LDAP 検索が送信されると、Directory Server が応答を停止する。

2101264 フィルタに "-" 文字を含む検索操作が失敗する。

2101312 リンク切断時間が 5 分を超えると、ネットワークが復旧してもコンシューマが同期されない。

2101314 SSL 経由でマルチマスターレプリケーションを使用しているとき、ADD 操作はレプリケートされず、DEL 操作は再実行できない。

2101332 有効期限の時間単位が正しいデフォルト値を取らない。

2101395 スキーマの削除が正しく伝播されない。

2101399 レプリケーションを介してスキーマがプッシュされると、コンシューマがハングアップする。

2106623 トランザクションログが削除されない場合がある。

2112994 ; および , を含む特殊な DN によって Directory Server がクラッシュする。

2113363 内部検索のためにコンソールに警告が表示される。

2115512 更新履歴ログのトリミングを有効にすると、Directory Server がクラッシュする。

2118489 マスターとコンシューマで上位オブジェクトクラスの展開が異なる。

2118767 複雑な DIT によってインポートが低速になる。

2119156 ACI コードでの起動時に Directory Server がクラッシュする。

2119159 レプリケーションアグリーメントの読み取り中にクラッシュが発生する。

2119577 連鎖サフィックス内に作成したエントリに対して LDAP 操作を行うと返される DN の値は小文字のみになってしまう。

2120295 `groupdn` として入れ子のグループが指定されると、ACL が予期したとおりに機能しない。

2120415 4G バイトの `realloc()` が実行されると、Directory Server が終了する。

2120445 サブサフィックスを追加しているとき、特定の検索中に Directory Server がクラッシュする。

2120502 `nsslapd-binary-mode` が設定されていると、起動中にクラッシュする。

2120542 「`password is expiring on consumer in %d seconds`」という予期しないメッセージが報告される。

2120918 マスターとコンシューマの間でレプリケートされたデータが一致しない。

2120950 複数回のパスワード変更によって、平文パスワードが生成される場合がある。

2120951 Directory Server 接続が突然ダウンする。

2121080 変更操作中、アクセス制御を確認しているときにクラッシュする。

2121115 旧バージョンのレプリケーションが有効になっていると、スキーマレプリケーション中にコンシューマでクラッシュする。

2121137 旧バージョン形式の更新履歴ログへの更新がマスターで失われる。

2121247 操作の再実行に関する、すでに表示された過剰な警告メッセージが表示される。

2121679 接続を閉じるときに競合状況が発生する。

2121953 オンラインインデックスタスク要求および同時アクセス制御検索によってハングアップする。

2122537 膨大な数の一致によって、インデックスが破壊される。

2122698 個別のパスワードポリシーでメモリーリークが発生する。

2123206 システムクロック間の差が 24 時間を超えていると、レプリケーションでクラッシュする。

2123826 負荷が高い状態にあるマスターを再起動したあと、データ不一致が発生する。

2123827 更新履歴ログがトリミングされていると、サーバーの停止中にクラッシュする。

2124111 バージョンが混在している環境で古いプロトコルを使用すると、トポロジで巨大なメモリーリークが発生する。

2124113 2K バイトより大きい DSML PDU を使用するとクラッシュする。

2124476 データベースの整合性をチェックするためのツールが必要である。

2124477 `fildif` が 2G バイトより大きいファイルを処理できない。

2124722 ハングアップ状態で停止したレプリケーションを再開するのに「ただちに更新を送信」操作が必要となる。

2124725 CLEANRUV タスクで RUV を削除する際に、読み取り専用レプリカ ID があると削除に失敗する。

2124727 レプリカロックと接続ロック。

2124730 スキーマレプリケーションで変更が見逃される場合がある。

2124731 部分文字列の検索が非常に低速である。

2124740 `mmldif` デルタファイルに LDIF の更新文が含まれない。

2124975 旧バージョン形式の更新履歴ログプラグインをオンに設定して変更を処理しているときにクラッシュする。

2125068 DN 正規化が失敗するとメモリーリークが発生する。

2125161 `db2ldif.pl -r` でハングアップする場合がある。

2125445 1 回の変更操作での属性の追加と削除が正しくレプリケートされない。

2125722 ファイル記述子の数に対するリソース制限が動的に増加されるとクラッシュする。

2125809 en-US ロケールの照合ルールを使用して検索を実行するときのパフォーマンスの問題。

2125848 グループメンバーに対するアクセス制御の処理に 4G バイトを割り当てると終了する。

2126520 更新が実行されていない場合でもチェックポイントが強制される。

2126571 CoS が、入れ子の組織内のエントリに対して有効でない。

2126669 検索の負荷の下でサブサフィックスまたはクローンの作成中にエラーが発生する。

2126886 変更操作中、ACL の評価時にデータベース内でデッドロックが発生する。

2127020 ネットワーク停止のあと、レプリケーションの再開が遅い場合がある。

2127266 コンシューマで、アイドルレプリケーション接続を閉じるときに、保留中の操作が存在することが検出されない。

2127456 `ldapmodify` を使用しているとき、変更が失われる。

2127545 存在しない属性を削除するときのパフォーマンスの問題。

2127627 複数値の属性を削除すると、`etime` が大きくなる。

2127691 レプリカへの同じエントリの追加と削除によって、レプリケーションの問題が発生する場合がある。

2127692 マルチマスター環境で削除標識をパージするとパフォーマンスが低下する。

2128056 削除操作の前に変更操作を行う必要があるという、両者の依存関係を示すフラグが付けられない。

2128417 標準のレプリケーションが無効になっていると、旧バージョン形式の更新履歴ログプラグインが変更を記録できない。

2129137 一意の ID が重複して生成される場合がある。

2129138 管理者にパスワードのリセットを許可すべきである。

2129139 SSL 経由でマルチマスターレプリケーションを使用しているとき、全体更新が失敗したあと、マスターを停止または使用できない。

2129140 更新履歴ログに記録できなかったエラーのリターンコードを追加する。

2129141 ハブ RUV 内の正しくないハブレプリカ ID (65535) のために、ハブがレプリケートしていない。

2129142 ディスク容量の不足によって `db2bak` 内部タスクでループが発生する。

2129143 修正を適用すると、ACI で正しくない結果が返される。

2129145 データに多数の同一の値が含まれていると、サーバー側ソートのパフォーマンスが低下する。

2129147 `passwordResetFailureCount` が 0 に設定されていると、`passwordRetryCount` が増加しない。

2129148 部分文字列検索でのパフォーマンスの低下。

2129149 仮想属性でメモリーリークが発生する。

2129152 `nsslapd-search-tune` が有効になっていると、サブタイプ属性の検索が正しく機能しない。

2129154 部分コンシューマを再起動すると、レプリケーションが設定エラーで停止する。

2129155 SASL バインドチェックでクラッシュが発生する。

2129159 レプリケーションアグリーメントが別のマスターから初期化されると、ハングアップする。

2129161 スタンバイレプリカをまれにしか更新しないと、レプリケーションが長期間停止する場合がある。

2131372 参照整合性ログファイルが切り捨てられたときにクラッシュする。

2131955 エラーログのローテーション中にエラーが発生するとハングアップする。

2131982 レプリケートされた単一値の属性に対して最初に空の値で置換操作を実行すると、それ以降追加操作ができなくなる。

2132137 レプリケートされた操作でクラッシュする。

2132359 再起動のあと、ログのローテーションが正しく機能しない。

2132568 生成された CSN が、系統的に以前の CSN より大きくなっていない。

2132654 入れ子の組織の下のエントリに対して、一部の CoS 属性が生成されない。

2132657 入れ子の組織の下のクラシック CoS が、設定されたとおりに機能しない。

2132929 `nsslapd-maxbersize` のデフォルト値が正しくない。

2133109 大規模なマルチマスター配備内のサーバーの完全性、状態、および可用性を監視するためのツールが必要である。

2133110 ハブでのスキーマチェックをデフォルトで有効にするべきである。

2133155 個別のパスワードポリシーで、パスワードの最小の文字数を設定する際に、無効な値を受け付けてしまう。

2133168 インポート中に、暗号化された属性値を含む LDIF によってインデックスが破壊される。

2133351 `ldif2db` がハングアップする現象が確認されている。

2133355 tombstone パージスレッドとアクセス制御プラグインの間でデッドロックが発生する。

2133503 Windows システムで、インスタンスのパスにスペースが含まれているとDSML 要求が失敗する。

2134041 正しくない `vlvFilter` を含む VLV インデックスの追加中にクラッシュする。

2134409 大きな記憶域割り当てを行うと、リモートサービス拒否攻撃を受ける可能性がある。

2134467 いくつかのサプライヤが更新履歴ログのトリミングに設定されていると、部分的なレプリケーションが停止する場合がある。

2134470 正しくない継続ブロックプレフィックスのために、`ldif2db` 中のマージでキーがスキップされる。

2134480 インデックスに継続ブロックが含まれていると、メモリーリークが発生する。

2134648 `mmldif` コマンドは、大規模なファイルをサポートするべきである。

2134901 個別のパスワードポリシーではプレーンテキストが指定されるが、新しいエントリ内のパスワードは暗号化された形式でレプリケートされる。

2134918 オンライン初期化のあとのエントリに CoS 属性が見つからない。

2136223 ACI グループメンバー評価でメモリーリークが発生する。

2136224 `nsslapd-db-transaction-batch-val` が設定されていると、トランザクションフラッシュが制限を適用できない。

2136869 インポートによって、`userPassword` 属性を含むエントリの状態が破壊される場合がある。

2138073 間違ったページサイズ計算によって、インデックスの再生成操作のあと、多数のオーバーフローページを含むインデックスが生成される。

2138081 部分文字列のパフォーマンスを向上させる必要がある。

2138837 `db2ldif.pl -r` で生成された LDIF ファイルのインポート中に、エントリがスキップされる場合がある。

2139899 セキュリティー保護された接続を介して結果を書き込んでいるときに、`ioblocktimeout` が必ずしも適用されない。

2139914 破壊された子エントリの名前を変更しているときにクラッシュする可能性がある。

2140785 パスワード履歴の処理中にメモリーリークが発生する。

2141919 旧バージョン形式の更新履歴ログと TMR プラグインが有効になっていると、ゼロ割り当てエラーが発生する。

2142817 マッチングルールインデックスの更新に失敗すると、LDAP 書き込み操作中にメモリーリークが発生する。

2142904 エントリがキャッシュされる前に、操作属性 `entrydn` が追加される。

2143075 VLV 検索でメモリーリークが発生する。

2143076 CN 属性の大文字と小文字が一致していない場合、バイナリコピーに続く復元が失敗する。

2143790 復号化コードでメモリーリークが発生する。

4537541 選択されたバックエンドに対して、旧バージョン形式の更新履歴ログプラグインを実行するべきである。

4538988 tombstone エントリを検索するときのパフォーマンスの問題。

4541437 大きなエントリの遅延処理中に、インポートからのフィードバックがない。

4541499 LDAP 上に、より多くのデータベース設定属性の設定をできるようにする。

4542920 LDAP 上に、更新履歴ログパージベクトルを提供できるようにする。

4738244 パスワードの期限が切れたあと、猶予ログイン期間を許可できるようにする。

4748577 コマンド行での完全なレプリケーション設定および管理をできるようにする。

4877553 `libwrap` のサポートをできるようにする。

4881004 デフォルトの更新履歴ログ最長有効期間を 7 日に設定できるようにする。

4882951 ファイルシステムのスナップショットバックアップを可能にするために、凍結モードを提供できるようにする。

4883062 初期化せずに追加のエントリをインポートできるようにする。

4925250 `db2ldif -s` でサブツリーをエクスポートしているときの不正なエラーメッセージ。

4951154 すべてのエントリが変更されるまで、変更のパフォーマンスが低下する。

4966365 `default` という名前のバックエンドインスタンスが機能しない。

4972234 ユーザーパスワードなしで、LDAP バインドを介してアカウントの検証をできるようにする。

5021269 オブジェクトクラス `nsTombstone` を含むエントリを追加すると、レプリケーションが失敗する場合がある。

5045529 SASL/GSS 暗号化のサポートが必要である。

5063150 SNMP エージェントをネイティブなオペレーティングシステムのエージェントとともに動作するようにする。

5095192 レプリケーションセッションでの結果のポーリング中、Directory Server の停止が遅くなることがある。

6197516 クラッシュのあとの復旧中の進捗状況を監視する方法またはツールが必要である。

6224962 キャッシュサイズに対する制御を強化する必要がある。

6249904 更新履歴ログデータベースやその他のデータベースが、データを削除したあとも縮小しない。

6252422 オンライン初期化のあと、コンシューマでロールが機能しない。

6264095 匿名バインドの無効化を許可できるようにする。

6272729 エントリが属するグループを表示する属性が必要である。

6290382 起動時に、「`trying to allocate 0 or a negative number of bytes`」というメッセージが出力されてクラッシュする。

6292118 クライアント接続が作成されたとき、アクセスログにポート番号を追加できるようにする。

6296288 アクティブな持続検索の数をカウントするための簡単な方法が必要である。

6321407 プラグインの実行順序をドキュメント化する。

6333657 tombstone をパージするとき、`nscpentrydn` インデックスのトラバースを避けるべきである。

6341364 アクセス制御ベースの接続を使用していて、クライアントリストが指定されていない場合のエラーをログ記録する。

6343255 ns-slapd が期限切れにならないように、原因となっている部分をコードから削除すべきである。

6370656 アクセスログと同じ形式で、`cn=monitor` の下に接続番号を表示できるようにする。

6394412 パスワード構文チェックのためのプラグインをサポートする。

6407613 `changeNumber` が、デフォルトではインデックス生成されない。

6411228 最大接続バックログキューが、誤って 128 にハードコードされている。

6442106 レプリケーションを有効にしているときにクラッシュする。

ベータプログラム期間中に次のバグが検出され、その後修正されました。

6330266 記憶域割り当てが失敗したときに、異常なシャットダウンが検出された。

6340943 `idsync` コマンドからの出力が紛らわしい。

6340950 コマンド行でレプリケーションアグリーメントを作成するオプションを使用しているときにエラーが発生する。

6342427 記憶域割り当ての問題によって、領域不足のメッセージが生成される。

6342905 コマンド行でのディレクトリ管理者パスワードの設定がわかりにくい。

6343490 パスワードリセットとパスワードロックアウトが誤って相互作用する。

6343505 パスワードのリセットが必要なバインドに対する結果コードが紛らわしい。

6344889 ログのローテーションのサブコマンド名が明確でない。

6344890 コマンド行ツールでは、管理者の指定に `--D` *bind-dn* オプションを使用するべきである。

6345610 コマンド行使用例では、常にグローバルオプションを一覧表示するべきである。

6345613 コマンド行でレプリケーションを開始したあとの出力が紛らわしい。

6346406 マスターレプリカから専用コンシューマへのバイナリコピーをできるようにする。

6348095 レプリケーション設定のためのサブコマンドをより容易にする。

6348096 一部のサブコマンド名が紛らわしい。

6348098 何度か試行を失敗したあと、パスワードロックアウトが正しく機能しない。

6348099 構文検証プロパティーのオンラインヘルプを修正する。

6348101 設定プロパティーの値を設定するときのユニットサイズに一貫性を持たせるべきである。

6348103 コマンド行からインデックスを一覧表示しているとき、オプションにエラーが発生する。

6349174 `dsconf` を使用したインポートが失敗する。

6355804 コマンド行を使用してレプリケーションを設定しているときに問題が発生する。

6383106 サーバーグループを設定するための Directory Service Control Center ページで、JSP が見つからないというエラーが発生する。

6405227 近似インデックスおよび部分文字列インデックスを追加すると、等価インデックスが機能を停止する。

6412227 `dsee_deploy` コマンドは、1 文字の長さしかないインストールディレクトリ名でも機能するべきである。

6415248 POSIX ユーザー用の DSCC の「エントリの概要」タブに `uid` 属性が正しく表示されない。

6416455 `nsslapd-infolog-area` を変更しても、`errors` のログ内容が変更されない。

6417038 DSCC で、`nobody` として実行されるサーバーインスタンスを作成できるようにする。

6417541 DSCC のディレクトリサーバーの設定タブで、クライアント制御の設定を変更できるようにする。

6417617 インストールによって既存の Java バージョンが削除されるべきではない。

6421070 DSCC でレプリケーションアグリーメントを削除できるようにする。

6424456 `pwdSafeModify` がオンのときに、`ldapmodify` を使用してパスワードを変更する方法を明確にする。

6449394 DSCC で既存のサーバーインスタンスを登録できるようにする。

6451067 DSCC でサーバーの場所を編集できるようにする。

6451889 Sun Java Web Console を使用して DSCC を登録するツールのパスがオンラインヘルプで有効になっていない。

6451892 実在インデックスが設定されていても、アクセスログ中の検索が依然としてインデックスを使用しない。

6452544 Solaris ゾーンでのサーバーの作成時、DSCC が正しく機能できるようにする。

6459897 DSCC を使用してサフィックスを設定したあとのエラーを修正する。

6459899 削除操作のあと、DSCC ウィンドウが閉じない。

6460721 インデックスタイプを削除すると、「`Error null`」というメッセージが生成される。

6481268 DSCC セッションがタイムアウトしたときに発生するサーバーインスタンス登録の問題を修正する。

Directory Server の既知の問題点と制限事項

この節では、リリース時点での既知の問題点および制限事項の一覧を示します。

Directory Server の制限事項

この節では、製品の制限事項の一覧を示します。制限事項には、必ずしもバグ ID が関連付けられるわけではありません。

ファイルアクセス権を手作業で変更した場合の問題点
: インストール済みの Directory Server Enterprise Edition 製品ファイルのアクセス権を変更すると、場合によってはソフトウェアが正常に動作しなくなる可能性があります。ファイルのアクセス権は、製品マニュアルの指示、または Sun サポートからの指示に従っている場合のみ変更してください。

  この制限事項を回避するには、適切なユーザーアクセス権およびグループアクセス権を持つユーザーとして製品をインストールします。

`cn=changelog` サフィックスをレプリケートした場合の問題点
: `cn=changelog` サフィックスのレプリケーションを設定することは可能ですが、実際に設定するとレプリケーションに干渉する可能性があります。`cn=changelog` サフィックスをレプリケートしないでください。

Windows 2003 システムで、ドイツ語ロケールの ZIP 形式の配布パッケージから `dsee_deploy` を使用してインストールされたソフトウェアを使用した場合の問題点。
: 代わりに、ドイツ語ロケールの Windows 2003 を実行している場合は、Java ES 配布を使用してネイティブパッケージからインストールしてください。

Sun Cluster 上でのフェイルオーバー後にデータベースキャッシュが古くなる場合がある
: Sun Cluster 上で Directory Server を実行しているとき、共有されていないディレクトリを使用するように `nsslapd-db-home-directory` を設定すると、データベースキャッシュファイルが複数のインスタンスによって共有されます。フェイルオー

バー後、新しいノード上の Directory Server インスタンスが、古くなっている可能性があるそのデータベースキャッシュファイルを使用します。

この制限に対処するには、共有ディレクトリを使用するように `nsslapd-db-home-directory` を設定するか、または Directory Server の起動時に `nsslapd-db-home-directory` 下のファイルが削除されるようにシステムを設定してください。

`LD_LIBRARY_PATH` に `/usr/lib` が含まれる場合に誤った SASL ライブラリがロードされる

`LD_LIBRARY_PATH` に `/usr/lib` が含まれている場合に、誤った SASL ライブラリが使用され、インストール後に `dsadm` コマンドが失敗する原因となります。

`cn=config` 属性の変更には LDAP の置換操作を使用する

`cn=config` に対する LDAP の変更操作では、置換サブ操作のみを使用できます。属性を追加または削除しようとすると、操作は拒否され、エラー `53` (`DSA is unwilling to perform`) が返されます。Directory Server 5 では、属性または属性値の追加または削除が可能でしたが、値の検証を経ることなく `dse.ldif` ファイルに更新が適用され、DSA の内部状態は DSA を停止して再開するまで更新されませんでした。

注 – `cn=config` 設定インタフェースは非推奨となっています。可能な場合は、代わりに `dsconf` コマンドを使用してください。

この制限への対処として、追加または削除サブ操作の代わりに、LDAP の変更操作の置換サブ操作を代用することができます。機能面での支障は発生しません。また、変更後の DSA 設定の状態が予測しやすくなります。

Windows システムで Directory Server が Start TLS 操作をデフォルトで許可しない

この問題点は、Windows システム上のサーバーインスタンスのみに影響します。この問題の原因は、Start TLS 操作を使用するときの Windows システム上のパフォーマンスです。

この問題に対処するには、`dsconf` コマンドで `-P` オプションを指定し、SSL ポートを直接使用して接続することを検討してください。別の方法として、ネットワーク接続がすでにセキュリティー保護されている場合は、`dsconf` コマンドの `-e` オプションの使用を検討してください。このオプションにより、セキュリティー保護された接続を要求せずに標準ポートに接続できます。

存在しないサーバーをレプリケーション更新ベクトルが参照する場合がある

レプリケートした Directory Server インスタンスをレプリケーショントポロジから削除したあとも、レプリケーション更新ベクトルがそのインスタンスへの参照を維持し続けることがあります。結果として、存在しなくなったインスタンスへのリフェラルが発生する可能性があります。

Common Agent Container がシステム起動時に開始しない
この問題点に対処するには、ネイティブパッケージからのインストール時に root 権限で cacaoadm enable コマンドを使用してください。

パスワードの有効期限を有効にすると大量の期限切れが発生する可能性がある
Directory Server では、パスワードが変更されるたびに pwdChangedTime 操作属性を更新するように動作が変更されました。この属性はパスワードの有効期限を有効にする前であっても更新されるため、パスワードの有効期限を有効にすると古いパスワードはただちに期限切れとなります。

また、バージョン 5 のパスワードポリシーモードで Directory Server を実行している場合、その他の条件が原因となって突然の期限切れが発生することがあります。以前にパスワードの有効期限を有効にし、あとで無効にしたことがある場合、Directory Server は passwordExpirationTime 操作属性にタイムスタンプを引き続き保持しています。したがって、パスワードの有効期限を再び有効にすると、古い passwordExpirationTime 操作属性を使用するパスワードがただちに期限切れとなる可能性があります。

pwdGraceAuthNLimit を使用すると、パスワードを変更するための猶予ログインをユーザーに許可することができます。また別の方法として、パスワードポリシーに関してバージョン 5 互換モードで Directory Server を実行している場合、パスワードの期限が切れる前にユーザーに警告するよう Directory Server を設定できます。それには、passwordExpireWithoutWarning を off に設定します。また、passwordWarning を適切に設定します。

max-thread-per-connection-count が Windows システムで正しく機能しない
Directory Server の設定プロパティー max-thread-per-connection-count は、Windows システムには適用されません。

Microsoft Windows のバグによりサービスのスタートアップの種類が無効と表示される
Microsoft Windows 2000 Standard Edition のバグ (http://support.microsoft.com/kb/287516/en-us)が原因で、Microsoft 管理コンソールを使用して Directory Server サービスを削除したあとも、このサービスが「無効」として表示されます。

Directory Server の既知の問題点

この節では、既知の問題点の一覧を示します。既知の問題点にはバグ ID が関連付けられています。

2113177　オンラインでのエクスポート、バックアップ、復元、またはインデックス作成の実行中にサーバーを停止したときに Directory Server がクラッシュする現象が確認されています。

2133169　Directory Server で LDIF からエントリをインポートするときに、createTimeStamp 属性および modifyTimeStamp 属性が生成されません。

LDIF インポートは高速化のために最適化されています。そのため、インポート処理ではこれらの属性を生成しません。この制限に対処するには、エントリをインポートする代わりに追加してください。インポートを実行する前に LDIF を前処理して属性を追加する対処策もあります。

2134435 pwdChangedTime 属性および usePwdChangedTime 属性は、Directory Server 5 2004Q2、2005Q4、および現在のバージョンで定義されています。それよりも古いバージョンでは、これらの属性は定義されていません。これらの属性が定義されているバージョンで、パスワードの有効期限を有効にしてエントリを定義したとき、エントリには pwdChangedTime 属性および usePwdChangedTime 属性が含まれます。(これらの属性が定義されていない) 古いバージョンを実行しているサプライヤにそのようなエントリをレプリケートすると、サプライヤはそのエントリへのあらゆる変更を処理できません。サプライヤのスキーマに pwdChangedTime 属性がないため、スキーマ違反エラーになります。

注 – usePwdChangedTime 属性は使用されなくなりました。代わりに、パスワードが変更されるたびに操作属性 pwdChangedTime が更新されるようになっています。

この問題点に対処するには、00core.ldif ファイルで pwdChangedTime 属性および usePwdChangedTime 属性を定義します。レプリケーショントポロジ内のサーバーのうち、これらの属性が定義されていないバージョンを実行しているすべてのサーバーに対してこれらの属性を定義する必要があります。属性タイプ定義は次のようになります。

```
attributeTypes: ( 1.3.6.1.4.1.42.2.27.8.1.16
 NAME 'pwdChangedTime'
 DESC 'Directory Server defined password policy attribute type'
 SYNTAX 1.3.6.1.4.1.1466.115.121.1.24
 SINGLE-VALUE
 USAGE directoryOperation
 X-DS-USE 'internal'
 X-ORIGIN 'Sun Directory Server' )

attributeTypes: ( 1.3.6.1.4.1.42.2.27.9.1.597
 NAME 'usePwdChangedTime'
 DESC 'Directory Server defined attribute type'
 SYNTAX 1.3.6.1.4.1.1466.115.121.1.15
 SINGLE-VALUE
 X-DS-USE 'internal'
 X-ORIGIN 'Sun Directory Server' )
```

古いバージョンを実行しているサーバーがレプリケーショントポロジにまだ存在している間は、新しいサーバーを新しいパスワードポリシーに移行しないでください。

2144251 レプリカを読み取り専用コンシューマに降格したあと、もう一度昇格すると、レプリケーションが停止する可能性があります。

4703503 長さが 0 のパスワードをディレクトリのバインドに使用する場合、そのバインドは匿名バインドになります。このバインドは単純バインドではありません。テストバインドを実行してユーザーを認証するサードパーティーのアプリケーションの場合、アプリケーションでこの動作が考慮されていないと、セキュリティーホールになる可能性があります。

4979319 Directory Server の一部のエラーメッセージで、実際には存在しない『Database Errors Guide』に言及しています。クリティカルなエラーメッセージの意味が理解できず、そのメッセージについての記述がドキュメントに存在しない場合は、Sun サポートまでお問い合わせください。

6358392 ソフトウェアを削除する場合、`dsee_deploy uninstall` コマンドでは既存のサーバーインスタンスが停止または削除されません。

この制限に対処するには、『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.0 Installation Guide』の指示に従ってください。

6366948 Directory Server で、サプライヤレプリカ上で `pwdFailureTime` 属性の値をクリアしたあとも、コンシューマレプリカ上ではこの属性値が保持される現象が確認されています。`userPassword` の変更がレプリケートされたあとも、属性値は保持されたままです。

6395603 ZIP 形式の配布パッケージからソフトウェアをインストールするとき、あとで Directory Service Control Center を使用してサーバーを管理する予定の場合は `-N` (`--no-cacao`) オプションを使用しないでください。Common Agent Container はあとで別途インストールすることはできません。

6401484 送信先サフィックスに対して SSL クライアント認証を使用するとき、`dsconf accord-repl-agmt` コマンドがレプリケーションアグリーメントの認証プロパティーを整合できません。

この問題点に対処するには、次の手順に従って、サプライヤの証明書をコンシューマ上の設定に格納します。ここで示すコマンド例は、2 つのインスタンスが同じホスト上にあることを前提としています。

1. 証明書をファイルにエクスポートします。

   次の例は、`/local/supplier` および `/local/consumer` に位置するサーバーを対象にエクスポートを実行する方法を示しています。

```
$ dsadm show-cert -F der -o /tmp/supplier-cert.txt /local/supplier defaultCert
$ dsadm show-cert -F der -o /tmp/consumer-cert.txt /local/consumer defaultCert
```

2. クライアントとサプライヤの証明書を交換します。

   次の例は、`/local/supplier` および `/local/consumer` に位置するサーバーを対象に交換を実行する方法を示しています。

```
$ dsadm add-cert --ca /local/consumer supplierCert /tmp/supplier-cert.txt
$ dsadm add-cert --ca /local/supplier consumerCert /tmp/consumer-cert.txt
```

3. コンシューマ上で SSL クライアントエントリを追加します。`usercertificate;binary` 属性に `supplierCert` 証明書を指定し、適切な `subjectDN` を指定します。
4. コンシューマ上でレプリケーションマネージャー DN を追加します。

   ```
   $ dsconf set-suffix-prop suffix-dn repl-manager-bind-dn:entryDN
   ```

5. `/local/consumer/alias/certmap.conf` 内のルールを更新します。
6. `dsadm start` コマンドで両方のサーバーを再起動します。

6410741　Directory Service Control Center では、値を文字列としてソートします。そのため、Directory Service Control Center で数字をソートすると、それらの数字は文字列であるかのようにソートされます。

0、20、および 100 を昇順にソートすると、0、100、20 というリストが得られます。0、20、および 100 を降順にソートすると、20、100、0 というリストが得られます。

6415184　複数バイトの名前を持つ Directory Server インスタンスは Directory Service Control Center に登録できません。

この問題点に対処するには、Common Agent Container を次のように設定します。

```
# cacaoadm stop
# cacaoadm set-param java-flags="-Xms4M -Xmx64M -Dfile.encoding=utf-8"
# cacaoadm start
```

6416407 エスケープした引用符またはシングルエスケープしたコンマを含む ACI ターゲット DN を Directory Server が正しく解析できません。次の例に示す変更は構文エラーとなります。

```
dn:o=mary\"red\"doe,o=example.com
changetype:modify
add:aci
aci:(target="ldap:///o=mary\"red\"doe,o=example.com")
 (targetattr="*")(version 3.0; acl "testQuotes";
 allow (all) userdn ="ldap:///self";)

dn:o=Example Company\, Inc.,dc=example,dc=com
changetype:modify
add:aci
aci:(target="ldap:///o=Example Company\, Inc.,dc=example,dc=com")
 (targetattr="*")(version 3.0; acl "testComma";
 allow (all) userdn ="ldap:///self";)
```

ただし、エスケープしたコンマが 2 つ以上含まれる例は、正しく解析されることが確認されています。

6428448 `dpconf` コマンドを対話型モードで使用するときに、「「`cn=Directory Manager`」のパスワードを入力:」プロンプトが 2 回表示される現象が確認されています。

6435416 フランス語ロケールでサーバー管理コマンドを実行している場合、これらのコマンドによって表示される一部のメッセージからアポストロフィーが欠落します。

6443229 Directory Service Control Center では、PKCS#11 外部セキュリティーデバイスまたはトークンを管理できません。

6446318 Windows システム上で、SASL 暗号化の使用時に SASL 認証が失敗する現象が確認されています。

6448572 国名を指定すると、Directory Service Control Center による自己署名付き証明書の生成は失敗します。

6449828 Directory Service Control Center では、`userCertificate` バイナリ値が正しく表示されません。

6468074 設定属性 `passwordRootdnMayBypassModsCheck` を有効に設定したときに、別のユーザーのパスワードを変更するときのパスワード構文チェックをすべての管理者が回避できるようにサーバーの動作が変更されましたが、この属性の名前は実際の動作を正しく反映していません。

6468096 ZIP 形式の配布パッケージからインストールする前、または `dsadm` コマンドを使用する前に、`LD_LIBRARY_PATH` を設定しないでください。

6469296 既存のサーバーの設定をコピーできる Directory Service Control Center の機能を使用して、プラグイン設定をコピーすることはできません。

6469688 Windows システムで、LDIF ファイル名に 2 バイト文字が含まれる LDIF を `dsconf` コマンドでインポートしようとしたときに、インポートが失敗する現象が確認されています。

この問題点に対処するには、2 バイト文字が含まれないように LDIF ファイル名を変更します。

6475244 中国語、日本語、または韓国語ロケールで動作中のブラウザを使用している場合、サーバーインスタンスの作成時に Directory Service Control Center によって生成されるログの複数バイト文字が化けて表示されます。

この問題点に対処するには、新しいサーバーインスタンスを作成する Common Agent Container で次のコマンドを実行します。

```
cocaoadm stop
cacaoadm set-param java-flags="-Xms4M -Xmx64M -Dfile.encoding=utf-8"
cacaoadm start
```

6478568 `dsadm enable-service` コマンドが Sun Cluster に対して正しく機能しません。

6478586 フランス語ロケールで動作中のブラウザを使用している場合、重複したアポストロフィーが Directory Service Control Center に表示されます。

6480753 Common Agent Container への Monitoring Framework コンポーネントの登録中に `dsee_deploy` コマンドがハングアップする現象が確認されています。

6482378 ルート DSE の `supportedSSLCiphers` 属性に、サーバーで実際にはサポートされていない NULL 暗号化方式が表示されます。

6482888 Directory Server が最低でも 1 回起動されていないと、`dsadm enable-service` コマンドがシステム再起動時に Directory Server の再起動に失敗します。

6483290 Directory Service Control Center と `dsconf` コマンドのどちらを使用しても、無効なプラグイン署名を Directory Server が処理する方法を設定できません。デフォルトの動作では、プラグインの署名の検証は行われますが、署名が有効であることは要求されません。署名が無効な場合、Directory Server は警告をログに記録します。

サーバーの動作を変更するには、cn=config 上で ds-require-valid-plugin-signature 属性と ds-verify-valid-plugin-signature 属性を調整します。どちらの属性も、値 on または off を設定できます。

6485560 Directory Service Control Center では、別のサフィックスにリフェラルを返すように設定されたサフィックスを参照できません。

6488197 Windows システムでのインストール後およびサーバーインスタンス作成後は、インストールおよびサーバーインスタンスのフォルダに対するファイルアクセス権により、すべてのユーザーにアクセスが許可されます。

この問題点に対処するには、インストールおよびサーバーインスタンスのフォルダのアクセス権を変更します。

6488262 dsadm autostart コマンドは、複数のインスタンスが指定された場合、これらのインスタンスのいずれかに対して失敗します。

6488263 dsadm autostart コマンドは、空白を含むインスタンスファイル名をサポートしていません。

6488303 dsmig コマンドでは、アップグレードおよび移行のマニュアルに規定されていない一部の設定属性の値が移行されない現象が確認されています。

次の設定属性が該当します。

- nsslapd-db-durable-transaction
- nsslapd-db-replication-batch-val
- nsslapd-disk-low-threshold
- nsslapd-disk-full-threshold

6489776 書き込み負荷が高い状態にあるマスターレプリカでの全体更新のあと、全体更新を実行したマスターの Generation ID が正しく設定されない場合があります。その結果、レプリケーションは失敗します。

6490653 Internet Explorer 6 を使用して、Directory Service Control Center 上で Directory Server のリフェラルモードを有効にすると、リフェラルモードの確認ウィンドウが小さいために、テキストの一部が切れて表示されません。

この問題点に対処するには、Mozilla Web ブラウザなどの別のブラウザを使用します。

6490762 新しい証明書を作成または追加したあと、変更を有効にするために Directory Server を再起動する必要があります。

6491849 レプリカをアップグレードし、新しいシステムにサーバーを移動したあと、新しいホスト名を使用するレプリケーションアグリーメントを再作

成する必要があります。Directory Service Control Center では、既存のレプリケーションアグリーメントを削除できますが、新規アグリーメントを作成することはできません。

6492894 Red Hat システムでは、`dsadm autostart` コマンドによって、ブート時に確実にサーバーインスタンスが起動されるとは限りません。

6492939 Directory Server は、データベース名、ファイル名、およびパス名の文字列中の中国語の複数バイト文字を正しく処理しません。

この問題点に対処するには、中国語の複数バイト文字を含む Directory Server サフィックスを作成するときに、複数バイト文字を含まないデータベース名を指定します。たとえば、コマンド行でサフィックスを作成する場合は、`dsconf create-suffix` コマンドの `--db-name` オプションを明示的に設定します。

```
$ dsconf create-suffix --db-name asciiDBName multibyteSuffixDN
```

サフィックスにデフォルトのデータベース名を使用しないでください。

6493957

6493977 Windows システムで、Directory Server がサービスとして有効になっている場合は、`dsadm cert-pwd-prompt=on` コマンドを使用しないでください。

6494027 コンシューマに対して全体更新が実行されたあとも、コンシューマとのアグリーメントに関して、次のレプリケーションエラーメッセージが引き続き出力される現象が確認されています。

```
Error sending replication updates. Error Message: Replication error
updating replica: Unable to start a replication session : transient
error - Failed to get supported proto. Error code 907.
```

```
Operational Status Error sending updates to server host:port. Error:
Replication error updating replica: Incremental update session aborted :
fatal error - Send extended op failed. Error code: 824.
```

これらのメッセージを解消するには、レプリケーションアグリーメントを無効にしてから、レプリケーションアグリーメントを有効にします。

6494448 マルチマスターレプリケーション構成で、負荷が高い状態にある複数のマスターレプリカを停止した場合、サーバーの停止に数分かかることがあります。

6494984 `read-write-mode` が `read-only` に設定されているマスターでインポート操作を実行したあと、Directory Server は再起動に失敗します。

6494997 DSML を設定している場合、`dsconf` コマンドは、適切な `dsSearchBaseDN` 設定を要求しません。

6495004 Windows システムでは、インスタンスの basename が ds である場合、Directory Server が起動に失敗する現象が確認されています。

6495459 Java ES Monitoring Framework を使用して DSML を監視するには、DSML を設定する必要があります。

6496916 中国語ロケールで動作中のブラウザを使用している場合、Directory Service Control Center の「サーバーグループの詳細」リンクが正しくないため、アプリケーションエラーページが表示されます。

6497053 ZIP 形式の配布パッケージからインストールする場合、dsee_deploy コマンドでは、SNMP およびストリームアダプタポートを設定するためのオプションが提供されません。

6497894 dsconf help-properties コマンドは、インスタンス作成後にのみ正しく機能するように設定されています。また、オンラインマニュアルで、dsml-client-auth-mode コマンドのデフォルト値が間違って記述されています。正しい値のリストは client-cert-first | http-basic-only | client-cert-only です。

6498537 Windows XP システムで Directory Service Control Center を使用するには、ゲストアカウントを無効にする必要があります。さらに、認証を成功させるには、レジストリキー HKEY_LOCAL_MACHINE\SYSTEM\CurrentControlSet\Control\Lsa\ForceGuest を 0 に設定する必要があります。

6500297
6500301 Solaris および Red Hat システムで ZIP 形式の配布パッケージからインストールすると、Directory Server は Common Agent Container (cacao) の再起動後に SNMP 経由で表示されません。

Solaris システムでこの問題点に対処するには、19 ページの「Directory Server、Directory Proxy Server、および Directory Server Resource Kit のオペレーティングシステム要件」に示されているすべての推奨パッチを適用します。

6501893 entrycmp、fildif、insync、mmldif、および ns-accountstatus コマンドの出力がローカライズされていません。

6501900
6501902
6501904 dsccmon、dsccreg、dsccsetup、および dsccreg コマンドによって表示される一部の出力がローカライズされていません。

6503595 Directory Service Control Center にはじめてアクセスして Directory Server インスタンスを登録したあと、Sun Java Web Console ログに警告と例外が書き込まれます。

「failed to retreive "server-pid" from command output」という警告、および例外は無視しても安全です。例外の出力は、次のように表示されます。

```
StandardWrapperValve[wizardWindowServlet]: Servlet.service() for servlet
 wizardWindowServlet threw exception
java.lang.IllegalStateException: Cannot forward after response has been
 committed
```

6503558 英語以外のロケールで Directory Service Control Center を設定する場合、Directory Service Control Center レジストリの作成に関するログメッセージは完全にローカライズされていません。一部のログメッセージは、Directory Service Control Center の設定時に使用されたロケールで表示されます。

6506020 Java ES インストーラを使用して Windows システムにインストールしたあとに手動で再起動すると、Directory Server は実行されていません。ただし、タスクマネージャーには Directory Server が実行されているように表示されることがあります。この状態が発生すると、タスクマネージャーからは Directory Server を再起動できません。

この問題点に対処するには、`logs` フォルダからプロセス ID ファイルを削除します。

6506043 Directory Server 5 2005Q1 からアップグレードする場合、`dsmig migrate-data -R -N` コマンドが失敗する現象が確認されています。

自動データ移行での失敗を回避するには、『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.0 Migration Guide』の第 3 章「Migrating Directory Server Manually」の説明に従ってデータを手動で移行します。

6507312 HP-UX システムでは、`gdb` での調査のあと、NSPR ライブラリを使用したアプリケーションがクラッシュしてコアダンプします。この問題は、`gdb` を実行中の Directory Server インスタンスに接続したあと、`gdb quit` コマンドを使用した場合に発生します。

6507803 Internet Explorer 6 で Directory Service Control Center にアクセスしている場合、サフィックスに対するインデックス設定の変更を保存すると、null エラーが表示されます。操作の進捗ウィンドウが動かなくなったように見えます。

この問題点に対処するには、別のブラウザ (Mozilla ベースのブラウザなど) で Directory Service Control Center にアクセスします。

6507817 Directory Service Control Center を使用してディレクトリエントリを編集している場合、エントリがほかのメソッドによって同時に変更されると、表示を更新しても変更が反映されません。

6508042 Directory Service Control Center の「グローバルパスワードポリシー」の「ユーザーが変更可能」フィールドが、実際に設定されている `pwd-user-change-enabled` の値を正しく表示しません。

この問題点に対処するには、`dsconf`(1M) コマンドを使用して `pwd-user-change-enabled` サーバープロパティーを読み取ります。

```
$ dsconf get-server-prop -w /tmp/ds.pwd pwd-user-change-enabled
pwd-user-change-enabled  :  off
```

6510594 Directory Server 5.2 からアップグレードする場合、証明書データベースに信頼できる証明書が含まれていないと、`dsmig migrate-config` コマンドは失敗します。この問題は、証明書データベースを作成したが、そのデータベースを使用したことも SSL を設定したこともない場合に発生する可能性があります。

この問題点に対処するには、次の手順に従います。

1. 新しい、空の Directory Server 6 インスタンスを削除します。
2. Directory Server 5.2 インスタンスが使用する *ServerRoot*`/alias/slapd-`*serverID*`-cert8.db` および *ServerRoot*`/alias/slapd-`*serverID*`-key3.db` ファイルの名前を変更します。

   ```
   $ cd ServerRoot/alias
   $ mv slapd-serverID-cert8.db slapd-serverID-cert8.db.old
   $ mv slapd-serverID-key3.db slapd-serverID-key3.db.old
   ```

3. アップグレードおよび移行プロセスをもう一度実行します。

6513644 HP-UX システムでは、Directory Server インスタンスを起動および停止すると、Directory Service Control Center に null ポインタ例外のエラーメッセージが表示される現象が確認されています。このエラーは、Directory Server インスタンスではなく、Directory Service Control Center に影響します。

6519263 Directory Server 設定を移行するとき、`-R` オプションは使用されているが、既存の設定にある一部のサフィックスがレプリケートされていない場合に、`dsmig migrate-config` コマンドは失敗します。

この問題点に対処するには、次の手順に従います。

1. 古いサーバーを停止します。
2. 古いサーバーインスタンスで、DN が cn=changelog5,cn=config である dse.ldif 設定ファイルエントリについて、ハッシュマーク # を使用して次の属性をコメントアウトします。

   ```
   #nsslapd-changelogmaxage: ...
   #nsslapd-changelogmaxentries: ...
   ```

3. これらの属性の値を記録しておきます。
4. dsmig migrate-config コマンドを使用して、サーバー設定を移行します。
5. 新しいサーバーインスタンスで、DN が cn=replica,cn=*suffix-dn*,cn=mapping tree,cn=config の形式をした設定エントリを含むすべてのサフィックスについて、次のコマンドを実行します。

   ```
   $ dsconf set-suffix-prop -p port suffix-dn repl-cl-max-age:old-value
   ```

   ここで *old-value* は、古いサーバーインスタンス内の nsslapd-changelogmaxage の値を示します。

```
$ dsconf set-suffix-prop -p port suffix-dn repl-cl-max-entry-count:old-value/nbr-suffixes
```

   ここで *old-value* は、古いサーバーインスタンス内の nsslapd-changelogmaxentries の値を示します。*nbr-suffixes* は、レプリケートされたサフィックスの総数です。

6523245 Directory Server では、パスワード品質チェックだけを有効にすることはできず、ほかに少なくとも 1 つのパスワードポリシー機能が必要です。

この問題点に対処するには、パスワード品質チェックを有効にするときに、少なくとも 1 つの追加のパスワードポリシー機能を有効にします。次の例では、パスワード品質チェックを有効にするとともに、パスワードの変更の間隔として空ける必要のある期間も指定しています。

```
$ dsconf set-server-prop pwd-check-enabled:on pwd-min-age:1h
```

◆ ◆ ◆ 第 4 章

Directory Proxy Server の修正されたバグと既知の問題点

この章では、Directory Proxy Server のリリース時点で判明している、製品固有の重要な情報を示します。

この章で説明する内容は、次のとおりです。

Directory Proxy Server で修正されたバグ

この節では、このリリースで修正されたバグの一覧を示します。

次のバグが、Directory Proxy Server の前回のリリース以降に修正されました。

4883696 読み取りおよび書き込み要求を別々に連鎖できるようにする。

4883701 アルファベットおよびハッシュベースのデータ配布アルゴリズムを追加する。

4951403 Directory Proxy Server はバインド要求のリフェラルに従うことができない。

4975248 Directory Proxy Server のログファイルは 2G バイトを超えることができない。

5014402 Directory Proxy Server のファイルハンドルでメモリーリークが発生する。

ベータプログラム期間中に次のバグが検出され、その後修正されました。

6348105 Directory Proxy Server を使用して検索を実行しているときにエラーが発生し、パスワードロックアウトが発生する。

6445085 Directory Service Control Center で証明書要求を作成できない。

6492361 Directory Proxy Server を使用した LDAP 検索が、クライアントアプリケーションによって放棄されたあと、Directory Proxy Server によって放棄されない。

6492368 結合データビューを介して部分文字列の検索を実行できない。

6492371 Directory Proxy Server を使用して DB2 を検索すると、`SqlException` が発生する。

6492375 JDBC オブジェクトクラスを作成するとき、二次テーブルが省略可能でない。

6493640 SQL データベースエントリの削除が正しく機能しない。

6493643 データベース内の共有されている複数値属性の値が無視される。

Directory Proxy Server の既知の問題点と制限事項

この節では、リリース時点での既知の問題点および制限事項の一覧を示します。

Directory Proxy Server の制限事項

この節では、製品の制限事項の一覧を示します。制限事項には、必ずしもバグ ID が関連付けられるわけではありません。

ファイルアクセス権を手作業で変更した場合の問題点
: インストール済みの Directory Server Enterprise Edition 製品ファイルのアクセス権を変更すると、場合によってはソフトウェアが正常に動作しなくなる可能性があります。ファイルのアクセス権は、製品マニュアルの指示、または Sun サポートからの指示に従っている場合のみ変更してください。

  この制限事項を回避するには、適切なユーザーアクセス権およびグループアクセス権を持つユーザーとして製品をインストールします。

自己署名サーバー証明書を更新できない
: 自己署名サーバー証明書を作成するときは必ず、その証明書を更新する必要がないように、十分な長さの有効期限を指定するようにしてください。

Directory Proxy Server では、デフォルトで SSLv2 が有効になる
: SSLv2 は、SSL/TLS セキュリティープロトコルファミリの中でもっとも古いプロトコルです。開発されたばかりのころはセキュリティープロトコルにおける大きな進歩と見なされましたが、現在では一般に、SSLv2 は比較的弱く、古くなったと考えられています。SSLv2 の使用はサポートされますが、お勧めできません。
  Directory Proxy Server では、デフォルトで SSLv2 が有効なままになっています。
  Directory Proxy Server で SSLv2 を無効にするには、SSLv3 と TLSv1 のみを含むように `enabled-ssl-protocols` プロパティーを設定します。次に例を示します。

```
$ dpconf get-server-prop -w /tmp/dps.pwd supported-ssl-protocols
supported-ssl-protocols  :  SSLv2Hello
```

```
supported-ssl-protocols  :  SSLv3
supported-ssl-protocols  :  TLSv1
$ dpconf set-server-prop -w /tmp/dps.pwd enabled-ssl-protocols:SSLv3 enabled-ssl-protocols:TLSv1
$ dpconf get-server-prop -w /tmp/dps.pwd enabled-ssl-protocols
enabled-ssl-protocols  :  SSLv3
enabled-ssl-protocols  :  TLSv1
```

Windows 2003 システムで、ドイツ語ロケールの ZIP 形式の配布パッケージから `dsee_deploy` を使用してインストールされたソフトウェアを使用した場合の問題点。

代わりに、ドイツ語ロケールの Windows 2003 を実行している場合は、Java ES 配布を使用してネイティブパッケージからインストールしてください。

Directory Proxy Server の既知の問題点

この節では、既知の問題点の一覧を示します。既知の問題点にはバグ ID が関連付けられています。

5042517　DN 変更操作が、LDIF、JDBC、結合、およびアクセス制御データビューに対してサポートされていません。

6255952　ローカルプロキシの ACI を定義する場合、実行権限取得制御を使用した操作で正しい情報が返されない可能性があります。

6356465　Directory Proxy Server で、`(targetattr = "locality;lang-fr-ca")` のようにターゲット属性へのサブタイプを指定する ACI が拒否される現象が確認されています。

6357160　`dpconf` コマンドは、プロパティー値に含まれている復帰改行文字を拒否しません。プロパティー値を設定するときは、復帰改行文字を使用しないでください。

6359601　ACI の設定時に、Directory Proxy Server が返す結果が LDAP データソースに対する直接検索の結果と一致しない現象が確認されています。

6374344　Directory Server データソースを再起動したあと、サーバーでバインド応答を読み取ることができないという操作エラーが Directory Proxy Server から返される現象が確認されています。

6383532　認証モードの設定を変更したときは、Directory Proxy Server を再起動する必要があります。

6386073　認証局によって署名された証明書の要求が Directory Proxy Server に対して生成されたあとで、Directory Service Control Center を更新することができます。そのとき、Directory Service Control Center は証明書に自己署名済みのラベルを付けます。

6388022　クライアントアプリケーションが SSL を使用して接続するとき、SSL 接続を使用するように設定することができます。Directory Proxy Server に

よって使用される SSL ポートが正しくない場合に、セキュリティー保護された検索のあとで Directory Proxy Server がすべての接続を閉じる現象が確認されています。

6390118 プロキシ認証ではなくクライアントアプリケーション証明書に基づく認証を使用するように設定されたとき、Directory Proxy Server がリフェラルホップ数を正確にカウントできません。

6390220 Directory Proxy Server でデータビューの `base-dn` プロパティーをルート DN ("") に設定できるのは、データビューの初回作成時に限られます。

6410741 Directory Service Control Center では、値を文字列としてソートします。そのため、Directory Service Control Center で数字をソートすると、それらの数字は文字列であるかのようにソートされます。

0、20、および 100 を昇順にソートすると、0、100、20 というリストが得られます。0、20、および 100 を降順にソートすると、20、100、0 というリストが得られます。

6439055 属性ルールを定義するときは、ドル記号 ($) を使用しないでください。

6439604 アラートを設定したあと、変更を有効にするには Directory Proxy Server を再起動する必要があります。

6445919 DN ルールを使用して仮想階層を設定した場合、Directory Proxy Server は、仮想 DN に基づいて常に検索を解決できるわけではありません。たとえば、仮想 DN が `uid=${entry.uid},cn=${entry.cn},dc=example,dc=com` と設定されている場合、`cn=`*some-cn*`,dc=example,dc=com` の範囲の検索は失敗します。

6447554 Directory Proxy Server で、数値形式または辞書形式のデータ配布を設定したときに、別のデータビューに移動するエントリの名前変更に失敗する現象が確認されています。

6458935 結合データビューを操作する場合、Directory Proxy Server は、その結合を構成するビューのデータ配布アルゴリズムを使用しません。

この問題点に対処するには、結合とデータ配布を一緒に使用するときに、結合データビューのレベルでデータ配布を設定します。

6463067 ネイティブパッケージからソフトウェアをインストールし、インストール時にネイティブパッケージの位置を変更した場合、`dpadm autostart` コマンドは機能しません。

6469780 JDBC データソースを設定したあと、変更を有効にするには Directory Proxy Server を再起動する必要があります。

6475156 `dpconf` コマンドで、`bind-dn` および `num-write-init` プロパティーを設定したときに再起動が必要というメッセージが表示されますが、これは誤りです。

6475710 RDN 変更操作は、JDBC データビュー内のエントリに対してサポートされていません。

6475727 `dpconf delete-jdbc-object-class` コマンドを使用したあと、変更を有効にするには Directory Proxy Server を再起動する必要があります。

6475743 Directory Proxy Server で、JDBC 経由でマップされる 2 つの属性が両方とも同じデータベーステーブルの列にマップされ、2 つの属性のうち 1 つしか取得されない現象が確認されています。

6477261 Directory Proxy Server は、設定で指定されていない JDBC 属性にアクセスしたとき、誤って error 32, no such object を返します。

6479264 JDBC データビューを介した 1 レベルの検索が失敗する現象が確認されています。

6479766 Directory Proxy Server では、LDAP によってスキーマを管理することはできません。

6486526 Windows システムで、`dsee_deploy` コマンドを使用して Directory Server のあとに Directory Proxy Server をインストールすると、いくつかの共通ファイルを削除できなかったことを示すエラーが返されます。

6486578 Directory Proxy Server は、一次テーブルで使用されている `filter-join-rule` プロパティーを無視するべきです。

6488197 Windows システムでのインストール後およびサーバーインスタンス作成後は、インストールおよびサーバーインスタンスのフォルダに対するファイルアクセス権により、すべてのユーザーにアクセスが許可されます。

この問題点に対処するには、インストールおよびサーバーインスタンスのフォルダのアクセス権を変更します。

6490763 Directory Proxy Server を介して Directory Server にアクセスしている場合、Directory Server の再起動後に、Access Manager で持続検索に関連したキャッシュの問題が発生する現象が確認されています。

この問題点に対処するには、Directory Server を再起動したあと、Access Manager または Directory Proxy Server を再起動します。

さらに細かいチューニングとして、Access Manager の試行の数や試行の間の遅延時間を増やして、持続検索の接続を再確立できます。これらのパラメータは、`AMConfig.properties` ファイル内の次のプロパティーを変更することによって増やすことができます。

- 試行の回数を表す `com.iplanet.am.event.connection.num.retries` を増やします。デフォルトは 3 回の試行です。
- 試行の間の遅延時間 (ミリ秒) を表す `com.iplanet.am.event.connection.delay.between.retries` を増やします。デフォルトは 3000 ミリ秒です。

6491133 Directory Service Control Center を使用して自己署名付き証明書を作成する場合、証明書名に複数バイト文字を使用しないでください。

6491845 Directory Proxy Server で許可されているデフォルトの LDAP コントロールは、Directory Service Control Center では表示されません。

6492355 Directory Proxy Server は、JDBC データソースをトランザクションでは更新しません。代わりに、Directory Proxy Server はこれらの操作を段階的に実行します。そのため、リレーショナルデータベースに対する更新操作の一部が失敗したにもかかわらず、操作の別の一部が成功することがあります。

6492376 JDBC 構文を設定したあと、変更を有効にするには Directory Proxy Server を再起動する必要があります。

6493349 Directory Service Control Center は、既存の除外されたサブツリーまたは代替検索ベースの DN を変更するときにコンマを削除します。

6494259 データビューの `base-dn` プロパティーを変更しても、Directory Proxy Server は `alternate-search-base-dn` プロパティーを再計算しません。

6494400
6494405 Windows システムで、Directory Proxy Server がサービスとして有効になっている場合は、`dpadm cert-pwd-prompt=on` コマンドを使用しないでください。

6494412 ローカルホストで Directory Proxy Server からメールユーザーへの電子メールアラートを有効にするには、電子メールアラートを有効にする前に `email-alerts-message-from-address` プロパティーを指定します。

```
$ dpconf set-server-prop email-alerts-message-from-address:admin@localhost
```

6494513 Directory Proxy Server のワークスレッドの数を増やすと、サーバーが再起動できなくなる場合があります。この問題は、サーバー起動時の `java.lang.OutOfMemoryError` エラーとして現れます。この問題は、Java 仮想マシンで使用できるメモリーが、すべてのワークスレッドに領域を割り当てるのに十分でない場合に発生します。

この問題点に対処するには、dpadm コマンドを使用してサーバーで使用できるメモリーを増やすか、またはサーバー設定ファイル *instance-path*/config/conf.ldif を *instance-path*/config/conf.ldif.startok で置き換えて以前の設定を使用します。

6494540 セキュリティー保護されていない LDAP アクセスをはじめて有効または無効にしたあと、変更を有効にするには Directory Proxy Server を再起動する必要があります。

6495395 split を使用した仮想ディレクトリマクロが正しく機能しません。

6497547 制限時間とサイズ制限の設定は、LDAP データソースでのみ機能します。

6497992 コマンド dpadm set-flags cert-pwd-store=off を使用したあと、Directory Service Control Center を使用して Directory Proxy Server を再起動できません。

6500275 Java 仮想マシンに追加のメモリーを割り当てる jvm-args フラグとともに使用した場合、記憶域割り当てが失敗したにもかかわらず、dpadm コマンドが終了状態 0 を返す現象が確認されています。ただし、コマンド行にはエラーメッセージが表示されます。

6500298 dpadm コマンドの jvm-args フラグを使用し、サーバーを再起動した場合、Java 仮想マシンに 2G バイトを超えるメモリーを正常に割り当てることができません。

この問題点に対処するには、dpadm restart の代わりに、dpadm stop と dpadm start を使用します。

6501867 ASCII 文字と日本語の複数バイト文字の両方を組み合わせたサーバーインスタンス名とともに dpadm start コマンドを使用した場合に失敗する現象が確認されています。

6505112 既存の接続ハンドラに data-view-routing-custom-list プロパティーを設定する場合、エスケープが必要な文字 (コンマなど) を含むデータビュー名を使用するとエラーが発生します。

この問題点に対処するには、エスケープが必要な文字を含むデータビュー名を指定しないでください。たとえば、DN を含むデータビュー名を使用しないでください。

6510583 以前のバージョンとは異なり、マニュアルページallowed-ldap-controls(5dpconf)で説明されているように、デフォルトでは Directory Proxy Server でサーバー側ソートコントロールはできません。

Directory Proxy Server でのサーバー側ソートコントロールのサポートは、allowed-ldap-controls プロパティーで指定される許可された LDAP コントロールのリストに server-side-sorting を追加することによって、有効にできます。

```
$ dpconf set-server-prop \
 allowed-ldap-controls:auth-request \
 allowed-ldap-controls:chaining-loop-detection \
 allowed-ldap-controls:manage-dsa \
 allowed-ldap-controls:persistent-search \
 allowed-ldap-controls:proxy-auth-v1 \
 allowed-ldap-controls:proxy-auth-v2 \
 allowed-ldap-controls:real-attributes-only \
 allowed-ldap-controls:server-side-sorting
```

既存の設定値もあわせて設定する必要があることに注意してください。そうしないと、サーバー側ソートコントロールのみが許可されます。

6511264 Directory Proxy Server の DN 名前変更機能を使用する際に、同じ DN コンポーネントが繰り返し登場する場合は、それらは一括して変更されることに注意してください。

たとえば、o=myCompany.com で終わる DN の名前を、dc=com で終わるように変更する場合を考えてみます。たとえば uid=userid,ou=people,o=myCompany.com,o=myCompany.com のようにコンポーネント o=myCompany.com が繰り返されている場合、名前が変更された結果、DN は uid=userid,ou=people,dc=com となり、uid=userid,ou=people,o=myCompany.com,dc=com とはなりません。

6516261 ドイツ語および中国語ロケールで使用された場合、Directory Service Control Center が新しい Directory Proxy Server インスタンスの作成に失敗する現象が確認されています。また、dsccreg add-server が Directory Proxy Server インスタンスの登録に失敗する現象も確認されています。

Windows システムでこの問題点に対処するには、インスタンスを作成する前に、英語 (U.S.) ロケールに切り替えます。

6517615 Directory Proxy Server を介して Oracle 9 にアクセスするための JDBC 接続を行う際に、マニュアルに記載されている手順だけでは、設定できない場合があります。

次の設定を考えてみます。ホスト myhost、ポート 1537 で待機している Oracle 9 サーバーがあるとします。インスタンスのシステム識別子 (SID) は MYINST です。このインスタンスには、データベース MYNAME.MYTABLE が含まれています。

一般的には、MYTABLE へのアクセスを設定するには、次のプロパティーを設定します。

- JDBC データソースで、db-name:MYINST を設定します。
- JDBC データソースで、db-URL:jdbc:oracle:thin:myhost:1537: を設定します。
- JDBC テーブルで、sql-table:MYNAME.MYTABLE を設定します。

ここまでの設定で機能しない場合は、さらに次のように MYTABLE へのアクセスを設定してみてください。

- JDBC データソースで、db-name:(CONNECT_DATA=(SERVICE_NAME=MYINST))) を設定します。
- JDBC データソースで、db-url:jdbc:oracle:thin:@(DESCRIPTION=(ADDRESS_LIST=(ADDRESS=(PROTOCOL=TCP)(HOST=myhost)(PORT=1537))) を設定します。
- JDBC テーブルで、sql-table:MYNAME.MYTABLE を設定します。

◆ ◆ ◆ 第 5 章

Identity Synchronization for Windows の修正されたバグと既知の問題点

この章では、Identity Synchronization for Windows のリリース時点で判明している、製品固有の重要な情報を示します。

この章で説明する内容は、次のとおりです。

Identity Synchronization for Windows で修正されたバグ

この節では、このリリースで修正されたバグの一覧を示します。

6203357 Identity Synchronization for Windows は、Active Directory と Directory Server の間のグループ同期をサポートする必要があります。

6255331 LDAP データベースの設定でサブサフィックス連鎖を有効にした場合、連鎖されるデータベースのレコードを Identity Synchronization for Windows を使用して変更することはできません。ユーザーは連鎖されたデータベース内のエントリの作成と削除のみを行うことができます。作成、削除、更新を含むすべての操作は、プラグインがロードされていない場合に可能です。

6306868 フェイルオーバー設定における二次フェイルオーバーサーバーは、サーバーを設定するための `o=NetscapeRoot` DIT を持つ必要があります。

6308208 マルチマスターレプリケーションの設定で複数ホストオプションを指定すると、コマンド `prepds` がエラーを返します。その結果、ユーザーはマルチマスターレプリケーション設定を実行できません。

6312235 Identity Synchronization for Windows をインストールするときの TO DO リストで、サポート対象プラットフォームの一覧から Linux についての情報が欠落しています。

6331112 アカウントのロックアウトおよびアクティブ化の同期が、新しいパスワードポリシー属性を使用して実行されません。

6332185 Active Directory と Directory Server 間の同期のための、実装されているべきグループタイプマッピングが未実装です。

6332186 Identity Synchronization for Windows で、グループのユーザー名属性が正しくマップされません。

6332189 Identity Synchronization for Windows で、グループおよびグループメンバーが同じ SUL に属するかどうかのチェックが行われません。

6332300 一次マスターがダウンしているときに、Identity Synchronization for Windows がユーザーの作成、変更、および削除を二次マスターから Windows Active Directory に同期できません。

6332912 Identity Synchronization for Windows が、ユーザーの作成、変更、または削除を Directory Server から Active Directory に同期しません。この問題は、一次ホストと、二次ホストのリスト内の N 番目の二次ホストがダウンしているときに発生します。

6333957 管理ユーザーが使用されなくなったため、Identity Synchronization for Windows によって作成される管理ユーザーは不要です。`uid=admin` ユーザーの作成を削除してください。

6333958 Directory Server コンソールにアクセスするためにディレクトリ情報ツリーをクリックすると、Identity Synchronization for Windows がエラーを返します。

6334706 Directory Server プラグインの設定オプションが選択されていないときでも、Identity Synchronization for Windows インストーラが Directory Server の再起動を要求します。

6337005 Identity Synchronization for Windows のコマンド行使用例で、リンクユーザーを参照していますがこれは誤りです。

6339416 アンインストールプログラムで、手動による管理サーバーのアンインストールをユーザーに促すべきですが、実際にはそのように動作しません。

6339420 Identity Synchronization for Windows インストーラによってインストールされるコンポーネントの一覧から管理サーバーが欠落しています。

6388815 入れ子のグループの同期は現時点でサポートされていないため、そのような同期を実行しようとすると Active Directory コネクタおよび Directory Server コネクタがクラッシュします。

Identity Synchronization for Windows の既知の問題点と制限事項

この節では、リリース時点での既知の問題点および制限事項の一覧を示します。

Identity Synchronization for Windows の制限事項

この節では、製品の制限事項の一覧を示します。制限事項には、必ずしもバグ ID が関連付けられるわけではありません。

ファイルアクセス権を手作業で変更した場合の問題点
: インストール済みの Directory Server Enterprise Edition 製品ファイルのアクセス権を変更すると、場合によってはソフトウェアが正常に動作しなくなる可能性があります。

  この制限事項に対処するには、適切なユーザーアクセス権およびグループアクセス権を持つユーザーとして製品をインストールします。

Identity Synchronization for Windows コアサービスのフェイルオーバーが行われない
: Identity Synchronization for Windows コアサービスがインストールされたシステムを失った場合、システムを再インストールする必要があります。Identity Synchronization for Windows コアサービスのフェイルオーバーはありません。

  `ou=services` (Identity Synchronization for Windows DIT の設定ブランチ) を LDIF 形式でバックアップし、Identity Synchronization for Windows の再インストール中にこの情報を使用してください。

Windows 2003 SP1 での認証動作の変更
: Windows 2003 SP1 をインストールした場合、デフォルトでは、ユーザーは旧パスワードを使用して自分のアカウントに 1 時間アクセスできます。

  その結果、ユーザーが Active Directory で自分のパスワードを変更すると、オンデマンド同期属性 `dspswvalidate` は true に設定され、旧パスワードが Directory Server への認証に使用できます。それにより、Directory Server で同期されるパスワードは、現在の Active Directory パスワードではなく、以前の旧パスワードになります。

  この機能を無効にする方法の詳細は、Microsoft Windows サポートマニュアル (`http://support.microsoft.com/?kbid=906305`)を参照してください。

管理サーバーを削除する前に `serverroot.conf` の削除が必要
: 管理サーバーを正常にアンインストールするには、管理サーバーのパッケージを削除する前に `/etc/mps/admin/v5.2/shared/config/serverroot.conf` を削除してください。

システムまたはアプリケーション障害時のデータ回復の実行

ハードウェアまたはアプリケーションで障害が発生したあと、同期されたディレクトリソースの一部にあるバックアップからデータを回復しなければならない場合があります。

ただし、データ回復の完了後、同期を通常どおり進行できることを保証するために、追加の手順を実行する必要があります。

コネクタは通常、メッセージキューに伝播された最後の変更についての情報を維持します。

コネクタ状態と呼ばれるこの情報は、コネクタがそのディレクトリソースから読み出す必要がある後続の変更を特定するために使用されます。同期されるディレクトリソースのデータベースがバックアップから復元される場合、コネクタ状態がすでに有効でなくなっている可能性があります。

Active Directory および Windows NT 用の Windows ベースのコネクタも内部データベースを維持します。データベースは、同期されるデータソースのコピーです。このデータベースは、接続されたデータソースのどの部分が変更されたかを特定するために使用されます。接続された Windows ソースがバックアップから復元された時点で、内部データベースは有効ではなくなります。

一般に、回復されたデータソースを再読み込みする目的には `idsync resync` コマンドを使用できます。

注 – パスワードを同期する目的には、1 つの例外を除いて再同期は使用できません。Directory Server 内のパスワードを無効にするために、`-i ALL_USERS` オプションを使用できます。これは、再同期データソースが Windows の場合に可能な方法です。また、SUL リストには Active Directory システムのみを含める必要があります。

ただし、すべての状況で `idsync resync` コマンドを使用できるとは限りません。

注意 – 次に説明する手順のいずれかを実行する前に、同期が停止していることを確認してください。

双方向の同期

同期設定に応じて、適切な修飾子設定を指定して `idsync resync` コマンドを使用します。`resync` 操作のターゲットとしては、回復されるディレクトリソースを使用します。

単方向の同期

回復されるデータソースが同期の送信先である場合、双方向の同期のときと同じ手順に従うことができます。

回復されるデータソースが同期のソースである場合、回復されるディレクトリソースの再読み込みには引き続き `idsync resync` を使用できます。Identity Synchronization for Windows の設定で、同期フローの設定を変更する必要はありません。`idsync resync` コマンドでは、`-o Windows|Sun` オプションを使用して、設定されたフローとは無関係に同期フローを設定することができます。

例として、次のシナリオを考えます。

Directory Server と Active Directory の間で、双方向の同期が設定されています。

- Microsoft Active Directory サーバーのデータベースを、バックアップから回復する必要があります。
- Identity Synchronization for Windows では、この Active Directory ソースは SUL AD に対して設定されます。
- 変更、作成、および削除の双方向同期は、この Active Directory ソースと Sun Directory Server ソースの間で設定されます。

▼ 単方向の同期を実行するには

1. 同期を停止します。

   ```
   idsync stopsync -w - -q -
   ```

2. **Active Directory** ソースを再同期します。また、変更、作成、および削除を再同期します。

   ```
   idsync resync -c -x -o Sun -l AD -w - -q -
   ```

3. 同期を再開します。

   ```
   idsync startsync -w - -q -
   ```

ディレクトリソース固有の回復手順

以降の手順は、特定のディレクトリソースに対応します。

Microsoft Active Directory

Active Directory をバックアップから復元できる場合は、双方向または単方向の同期について説明した節の手順に従います。

ただし、重大な障害が発生したあとは、使用するドメインコントローラの変更が必要になる場合があります。この場合、Active Directory コネクタの設定を更新するため、次の手順に従います。

▼ ドメインコントローラを変更するには

1. **Identity Synchronization for Windows** 管理コンソールを起動します。
2. 「設定」タブを選択します。「ディレクトリソース」ノードを展開します。
3. 適切な **Active Directory** ソースを選択します。

4 「コントローラの編集」をクリックし、新しいドメインコントローラを選択します。

選択したドメインコントローラを、ドメインの NT PDC FSMO ロール所有者にします。

5 構成を保存します。

6 **Active Directory** コネクタが動作しているホストで、`Identity Synchronization` サービスを停止します。

7 *ServerRoot*`/isw-`*hostname*`/persist/ADP`*xxx* の下にある、ディレクトリを除くすべてのファイルを削除します。ここで、*xxx* は **Active Directory** コネクタ **ID** の数字部分です。

たとえば、Active Directory コネクタ ID が `CNN100` の場合、この数字は `100` です。

8 **Active Directory** コネクタが動作しているホストで、`Identity Synchronization` サービスを開始します。

9 単方向または双方向の同期について説明した節に示されている同期フローに従い、手順を進めます。

フェイルオーバーと Directory Server

旧バージョン形式の更新履歴ログデータベースと、同期されるユーザーがいるデータベースのどちらか一方または両方が、重大な障害によって影響を受ける可能性があります。

▼ Directory Server のフェイルオーバーを管理するには

1 旧バージョン形式の更新履歴ログデータベースの場合

旧バージョン形式の更新履歴ログデータベースで、Directory Server コネクタが処理できない変更が発生した可能性があります。旧バージョン形式の更新履歴ログデータベースの復元に意味があるのは、バックアップに未処理の変更が含まれる場合に限られます。*ServerRoot*`/isw-`*hostname*`/persist/ADP`*xxx*`/accessor.state` ファイル内の最新のエントリを、バックアップ内の最後の `changenumber` と比較します。`accessor.state` の値がバックアップ内の `changenumber` 以上である場合は、データベースを復元しないでください。その代わりに、データベースを再作成してください。

旧バージョン形式の更新履歴ログデータベースが再作成されたあとで、必ず `idsync prepds` を実行してください。別の方法として、Identity Synchronization for Windows 管理コンソールの「ディレクトリソース」ウィンドウで「Directory Server の準備」をクリックします。

Directory Server コネクタは、旧バージョン形式の更新履歴ログデータベースが再作成されたことを検出し、警告メッセージをログに出力します。このメッセージは無視しても安全です。

2 同期対象データベースの場合

同期対象データベースのバックアップが利用できない場合、Directory Server コネクタを再インストールする必要があります。

同期対象データベースをバックアップから復元できる場合は、双方向または単方向の同期について説明した節の手順に従います。

Identity Synchronization for Windows の既知の問題点

この節では、既知の問題点の一覧を示します。既知の問題点にはバグ ID が関連付けられています。

4997513 Windows 2003 システムでは、ユーザーが次回ログオン時にパスワードを変更しなければならない設定がデフォルトでオンになっています。Windows 2000 システムでは、この設定はデフォルトではオフです。

Windows 2000 および Windows 2003 システムで「ユーザーは次回ログオン時にパスワードの変更が必要」設定をオンにしてユーザーを作成すると、Directory Server 上ではパスワードなしのユーザーが作成されます。ユーザーが次回 Active Directory にログインするとき、ユーザーはパスワードを変更する必要があります。この変更により、そのユーザーの Directory Server 上でのパスワードは無効化されます。またこの変更により、そのユーザーが次回 Directory Server への認証を行うときに、オンデマンドでの同期が強制的に必要になります。

Active Directory 上でパスワードを変更するまでの間、ユーザーは Directory Server への認証を行うことができません。

5077227 Remote Administration 2.1 を含む pcAnywhere 10 で Identity Synchronization for Windows コンソールを表示しようとすると、問題が発生する可能性があります。pcAnywhere バージョン 9.2 では、同様の問題の発生は確認されていません。問題が解決しない場合は、リモート管理ソフトウェアを削除してください。代替としては VNC を使用できます。VNC では、Identity Synchronization for Windows コンソールの表示に関する既知の問題は確認されていません。

5097751 FAT 32 でフォーマットされたファイルシステム上の Windows システムに Identity Synchronization for Windows をインストールする場合、ACL は利用できません。また、セットアップ時にアクセス制限が施行されません。セキュリティーを確保するために、Identity Synchronization for Windows のインストールは必ず、NTFS ファイルシステム上の Windows に対して行うようにしてください。

6254516 コンシューマ上で Directory Server プラグインをコマンド行を使用して設定するとき、プラグインはコンシューマに対して新しいサブコンポーネント ID を生成しません。プラグイン設定はコンシューマに対して新しい ID を生成しません。

6288169 Identity Synchronization for Windows 用のパスワード同期プラグインは、`accountlock` および `passwordRetryCount` をチェックする前であっても、未同期のアカウントについて Active Directory へのバインドを試みます。

この問題点を解決するには、LDAP サーバー上でパスワードポリシーを施行します。また、ユーザー検索時に次のフィルタを使用するように Access Manager を設定します。

```
(| ( !(passwordRetryCount=*) ) (passwordRetryCount <=2) )
```

ただしこの対処策では、LDAP 経由でのログイン試行数が多すぎるときに「ユーザーが見つからない」エラーが返されます。この対処策では、Active Directory アカウントをブロックしません。

6331956 `o=NetscapeRoot` がレプリケートされる場合に、Identity Synchronization for Windows コンソールが起動に失敗します。

6332197 ユーザー情報がまだ作成されていないグループを Directory Server 上で同期すると、Identity Synchronization for Windows はエラーを返します。

6336471 Identity Synchronization for Windows プラグインは、連鎖されたサフィックスを通じた検索を行うことができません。結果として、Directory Server インスタンス上で変更およびバインド操作を実行できません。

6337018 Identity Synchronization for Windows で、XML ファイルへの Identity Synchronization for Windows 設定のエクスポートがサポートされているべきですが、実際にはサポートされていません。

6386664 Identity Synchronization for Windows は、グループ同期機能を有効にした時点で Active Directory と Directory Server の間のユーザーおよびグループの情報を同期します。コマンド行から `resync` コマンドが発行されてからはじめて同期が発生するのが理想的な動作です。

6452425 `SUNWtls` パッケージのバージョン 3.11.0 がインストールされている Solaris システムに Identity Synchronization for Windows をインストールすると、管理サーバーが起動しない場合があります。この問題を解決するには、Identity Synchronization for Windows をインストールする前に `SUNWtls` パッケージをアンインストールします。

6251334 Active Directory ソースの変更後であっても、ユーザー削除の同期を停止できません。したがって、同期対象ユーザー (SUL) リストが同じ Active Directory ソース内の別の組織ユニット (`OU`) にマップされる場合、削除の同期は継続します。ユーザーは Directory Server インスタンス上では削除

されたように見えます。SUL マッピングを持たない Active Directory ソースからユーザーが削除される場合でも、ユーザーは削除されたように見えます。

6335193 ユーザーを Directory Server から Active Directory に同期する目的で、再同期コマンドの実行を試みる場合があります。未同期のユーザーが未同期グループに追加されると、グループエンティティーの作成に失敗します。

この問題を解決するには、同期が正しく行われるように、`resync` コマンドを 2 回実行する必要があります。

6339444 同期ユーザーリストで「ベース DN」ペインの「参照」ボタンを使用して、同期のスコープを指定できます。スコープを指定するとき、サブサフィックスは取得されません。

この問題点に対処するには、読み取りおよび検索に対して匿名アクセスを許可する ACI を追加します。

6379804 このエラーは、Windows システム上で Identity Synchronization for Windows のコアコンポーネントをバージョン 1.1 SP1 にアップグレードする際に発生します。`updateCore.bat` ファイルで、管理サーバーへの参照がハードコードされている部分に誤りがあります。その結果、アップグレード処理の一部が正常に完了しません。

この問題を解決するには、ユーザーは、アップグレードスクリプトの管理サーバーを参照している部分 (2 箇所) を置き換える必要があります。

アップグレードスクリプトの 51 行目と 95 行目の次の命令を置き換えます。変更する行は次のとおりです。

```
net stop "Sun Java(TM) System Administration Server 5.2"
```

この行を次のように変更します。

```
net stop admin52-serv
```

指示どおりに変更を行ったあとで、アップグレードスクリプトを再実行してください。

6388872 Directory Server で、Active Directory に対する Windows の作成式について、フロー `cn=%cn%` はユーザーとグループの両方に対して機能します。それ以外のすべての組み合わせに対し、Identity Synchronization for Windows は同期中にエラーを発生します。

6332183 ユーザー `dn: user1, ou=isw_data` を既存のグループ `dn: DSGroup1,ou=isw_data` に追加するシナリオを考えます。ユーザーをグループから削除する (削除操作を実行する) と、グループの `uniquemember`

が変更されます。ここで、同じ DN を持つグループに同じユーザーが追加されると仮定します。`userdn: user1, ou=isw_data` に対して追加操作が実行されます。

削除が可能になる前に追加操作のフローが Directory Server から Active Directory に移ると、Identity Synchronization for Windows は、ユーザーがすでに存在するという例外をログに出力する可能性があります。同期中に削除操作よりも先に追加操作が実行される競合状況が発生する可能性があり、結果として、Active Directory が例外をログに出力します。

6444341 Identity Synchronization for Windows のアンインストールプログラムがローカライズされていません。`WPSyncResources_`*X*`.properties` ファイルの `/opt/sun/isw/locale/resources` ディレクトリへのインストールが失敗します。

この問題点に対処するには、不足している `WPSyncResources_`*X*`.properties` ファイルを、`installer/locale/resources` ディレクトリから手動でコピーします。

6444878 Java Development Kit (JDK) バージョン 1.5.0_06 のインストールと設定は、管理サーバーを実行する前に行ってください。

6444896 Identity Synchronization for Windows のテキストベースインストールの実行時に、管理パスワードを空にしたまま Enter キーを押すと、インストールプログラムが終了します。

6452538 Windows プラットフォームで、Identity Synchronization for Windows によって使用される Message Queue 3.5 では、`PATH` 値の長さが 1K バイト未満である必要があります。これよりも長い値は切り捨てられます。

6486505 Windows では、Identity Synchronization for Windows は英語および日本語ロケールのみをサポートします。

6477567 Directory Server Enterprise Edition 6.0 で、Identity Synchronization for Windows 用の Directory Server プラグインは Directory Server インストールとともにインストールされます。Identity Synchronization for Windows のインストーラでは Directory Server プラグインはインストールされません。代わりに、Identity Synchronization for Windows はプラグインの設定のみを行います。

このリリースの Identity Synchronization for Windows では、テキストベースのインストーラによるインストール処理中に、Identity Synchronization for Windows 用 Directory Server プラグインの設定が要求されることはありません。対処策として、Identity Synchronization for Windows インストールの完了後に、コマンドプロンプトから `Idsync dspluginconfig` コマンドを実行します。

6472296 日本語 Windows システムにインストールする際に一部のローカライズパッケージがインストールされず、Identity Synchronization for Windows のユーザーインタフェースの一部が英語で表示される場合があります。

この問題点に対処するには、インストールを開始する前に、PATH 環境変数に unzip.exe を追加します。

6485333 インストーラとアンインストーラが一部国際化されていないため、英語のメッセージが表示されます。

6492125 中国語および韓国語ロケールでは、Identity Synchronization for Windows のオンラインヘルプの目次が正しく表示されません。

6501874 Directory Server パスワード互換モード (pwd-compat-mode) が DS6-migration-mode または DS6-mode に設定されている場合、Directory Server から Active Directory へのアカウントのロックアウトの同期が失敗します。

6501886 Active Directory ドメインの管理者パスワードを変更した場合、Identity Synchronization for Windows コンソールに警告が表示される現象が確認されています。使用しているパスワードが有効な場合でも、表示される警告は「ホストのクレデンシャルが無効です:*hostname*.*domainnname*」となります。

◆ ◆ ◆ 第 6 章

Directory Editor の修正されたバグと既知の問題点

この章では、Directory Editor のリリース時点で公開されている、製品固有の重要な情報を示します。

この章で説明する内容は、次のとおりです。

Directory Editor で修正されたバグ

この節では、このリリースで修正されたバグの一覧を示します。

次のバグが、Directory Editor の前回のリリース以降に修正されました。

6319791 Directory Editor にログインしたあと、Application Server 管理コンソールにアクセスできない。

6404788 デフォルトのユーザーロールからブラウズ機能を削除すると、ユーザーは自分のディレクトリ情報を変更できなくなる。

6421100 Directory Editor が、アンパサンド文字 (&) を含むエントリを正しく処理しない。

6433198 Directory Editor では、アンパサンド文字 (&)、等号 (=)、または疑問符 (?) を含む名前を持つグループにメンバーを追加できない。

6444426 基本検索でフィルタ条件が考慮されない。代わりに、検索では、選択した型に一致する管理対象ディレクトリ内のすべてのエントリが返される。

6444329 Directory Editor で、複数バイトのユーザー ID でのログインができない。

6460611 Directory Editor では、複数バイトの DN を含む設定サフィックスを使用できない。

Directory Editor の既知の問題点と制限事項

この節では、リリース時点での既知の問題点および制限事項の一覧を示します。

Directory Editor の制限事項

この節では、製品の制限事項の一覧を示します。制限事項には、必ずしもバグ ID が関連付けられるわけではありません。

Directory Proxy Server 経由で Directory Editor を使用するときの設定要件

Directory Proxy Server 経由でデータにアクセスする目的で Directory Editor を設定するとき、次の制約に従う必要があります。

- Directory Editor の設定ディレクトリは、Directory Proxy Server ではなく Directory Server のインスタンスである必要があります。

  Directory Editor の設定ディレクトリは、Directory Editor を初期設定するときに「起動プロパティー」ページで指定します。設定ディレクトリには、「起動プロパティー」ページで指定するバインド DN とパスワードで構成されるエントリが含まれている必要があります。また設定ディレクトリには、「起動プロパティー」ページのドロップダウンリストでその DN を選択する設定サフィックスも存在する必要があります。

- Directory Editor を使用してデータにアクセスするときの中継点となるすべての Directory Proxy Server インスタンスに対して、ディレクトリスキーマを検索するためのアクセス用のデータビューを設定する必要があります。Directory Server に対して、スキーマは `cn=schema` 下に格納されます。

  たとえば、次のコマンドは、`My Pool` 内の Directory Server インスタンスへのスキーマビューを設定します。

  ```
  $ dpconf create-ldap-data-view -h localhost -p 1390 "schema view" \
   "My Pool" cn=schema
  Enter "cn=Proxy Manager" password:
  $
  ```

- Directory Editor を使用してデータにアクセスするときの中継点となるすべての Directory Proxy Server インスタンスを、データソースへのアクセスを提供するように設定する必要があります。特に、Directory Proxy Server インスタンスは、最低限 Directory Server データソースにバインドする目的で Directory Editor へのログインをユーザーに許可するように設定されたデータビューを備える必要があります。

  たとえば、次のコマンドは、接続されたデータソース (`My Pool` 内の `My DS`) に対するすべての LDAP 操作の経路となるように Directory Proxy Server を設定します。

```
$ dpconf set-attached-ldap-data-source-prop -h localhost -p 1390 \
 "My Pool" "My DS" add-weight:1 bind-weight:1 compare-weight:1 delete-weight:1 \
 modify-dn-weight:1 modify-weight:1 search-weight:1
Enter "cn=Proxy Manager" password:
$
```

Directory Editor の既知の問題点

この節では、既知の問題点の一覧を示します。既知の問題点にはバグ ID が関連付けられています。

6257547　Directory Editor で表示される検索結果の数は設定可能であり、デフォルトは 25 個です。最大表示数を超える数のエントリが検索で返される場合、検索を絞り込んで結果件数を減らします。

6258793　Sun Java Enterprise System Application Server 8 への配備時にエラーファイルが出力されます。また、ログインに失敗します。

この問題点に対処するには、`Server.policy` ファイルに次の grant 文が含まれていることを確認します。

```
grant codeBase "file:${de.home}/-" {
  permission javax.security.auth.AuthPermission "getLoginConfiguration";
  permission javax.security.auth.AuthPermission "setLoginConfiguration";
  permission javax.security.auth.AuthPermission "createLoginContext.SunDirectoryLogin";
  permission javax.security.auth.AuthPermission "modifyPrincipals";
  permission java.lang.RuntimePermission     "createClassLoader";
};
```

ここで指示している grant 文を使用してください。『Sun Java System Directory Editor 1 2005Q1 Installation and Configuration Guide』に示されている grant 文は正しくありません。

6397929　Tomcat 5.5 への配備時に、JAAS 設定ファイルが見つからないことが原因でログインに失敗します。

この問題点に対処するには、まず、次の行を含む *tomcat-install-path*`/bin/setenv.sh` ファイルを作成します。

```
JAVA_OPTS="-Djava.security.auth.login.config=$CATALINA_HOME/conf/jaas.conf"
```

次に、*tomcat-install-path*`/conf/jaas.conf` ファイルを作成します。次の行が含まれるようにファイルを編集します。

```
SunDirectoryLogin {
 com.sun.dml.auth.SunDirectoryLoginModule required;
};
```

6436199 Directory Editor で、デフォルトのユーザーフォーム Create に対して行った変更が保持されません。この問題は、Directory Editor が動作するアプリケーションコンテナが、変更が検証される前に再起動されるときに発生します。

この制限に対処するには、設定を復元したあとでアプリケーションコンテナを再起動しないようにします。代わりに、ログインし、「設定」タブで管理対象ディレクトリを検証し、保存して再びログインします。

6441350 英語以外のロケールで動作している Application Server 上に配備した Directory Editor で起動設定ページを保存したあとに、アプリケーションエラーが表示される場合があります。

この問題点に対処するには、UNIX システムの場合は英語ロケールで Application Server を起動します。Windows システムの場合は、Application Server を何回か再起動してみてください。

6456576 Application Server に配備された Directory Editor で「ヘルプ」ボタンをクリックすると、ヘルプコンテンツが正しく表示されません。

この問題点に対処するには、次のように `Web-INF/sun-web.xml` を編集してから、Application Server を再起動します。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<!DOCTYPE sun-web-app PUBLIC "-//Sun Microsystems, Inc.//DTD
 Sun ONE Application Server 7.0 Servlet 2.3//EN"
 "http://www.sun.com/software/sunone/appserver/dtds/sun-web-app_2_3-0.dtd">
<sun-web-app>
    <description>tomcat-test</description>
    <class-loader delegate="false"/>
</sun-web-app>
```

6469655 HP-UX システムで、`install.sh` スクリプトを使用した Directory Editor のインストールが失敗する現象が確認されています。

この問題点に対処するには、まず別のシステム上で Directory Editor をインストールし、その結果としてできた `de.war` ファイルを、HP-UX システム上の Web アプリケーションコンテナに配備します。

6480803 英語以外のロケールで動作している Application Server に配備されている場合、ブラウザの言語設定を `en` または `en_US` に切り替えても、Directory Editor のインタフェースは英語で表示されません。

この問題点に対処するには、次のコマンドを実行します。

```
# cd /var/opt/SUNWappserver/domains/domain1/applications/j2ee-modules/de/config
# cp DMLMessages.properties DMLMessages_en.properties DMLMessages_en_US.properties
```

6487652 ユーザー ID に複数バイト文字が含まれているユーザーとしてログインした場合、自分のディレクトリ情報を編集できません。「Edit My Directory Information」をクリックすると、空白ページが表示されます。

6488644 英語以外のロケールで動作している Directory Editor に一般ユーザーとしてログインした場合、「ホーム」ページおよび「Change My Directory Password」ページはローカライズされていません。

6489725 Windows 上の Apache Tomcat に英語以外のロケールで Directory Editor をインストールした場合、設定、保存、および更新操作を行うとエラーページが表示されます。

6490590 英語以外のロケールで Directory Editor をインストールする場合、インストーラのテキストやメニューが正しく表示されません。

この問題点に対処するには、UNIX システムの場合は、インストーラを実行する前に英語ロケールに変更します。Windows システムの場合は、インストーラを実行する前に、「コントロールパネル」>「地域と言語のオプション」を使用してロケールを英語に切り替えます。

6492259 スペイン語ロケールで動作している Internet Explorer 6 で Directory Editor にアクセスしている場合、オンラインヘルプに文字化けが発生します。

6493975 Directory Editor では、複数のサフィックスを表示できません。

この問題点に対処するには、別のアプリケーションサーバーまたは同じアプリケーションサーバー上の別のドメインに、Directory Editor を追加でインストールします。

◆ ◆ ◆ 第 7 章

Directory Server Resource Kit の修正されたバグと既知の問題点

この章では、Directory Server Resource Kit のリリース時点で判明している、製品固有の重要な情報を示します。

この章で説明する内容は、次のとおりです。

Directory Server Resource Kit について

この節では、Directory Server Resource Kit コンポーネントの概要を示します。

Directory Server Resource Kit は、開発、配備、データセンター運用の各段階でディレクトリサービス関連の作業を行うためのツールを提供します。

ディレクトリサブツリーの削除
: LDAP のディレクトリサブツリー全体を 1 つのコマンドで削除するには、`ldapsubtdel`(1) ツールを使用します。

DSML v2 アクセス

: Web アプリケーションの設計、開発、およびテスト時に DSML v2 経由のディレクトリアクセスをテストするには、次のツールを使用します。

  - `dsmlmodify`(1) コマンド: エントリの追加、削除、変更、名前変更、および移動
  - `dsmlsearch`(1) コマンド: エントリの検索と読み取り

LDAP パフォーマンス測定

: LDAP によるディレクトリへのアクセス時にバインド、読み取り、および書き込みのパフォーマンスを測定するには、次のツールを使用します。

  - `authrate`(1) コマンド: LDAP バインドパフォーマンスの測定
  - `modrate`(1) コマンド: LDAP 書き込みパフォーマンスの測定

- `searchrate`(1) コマンド: LDAP 読み取りパフォーマンスの測定

LDIF の生成と変換

サイズ調整およびチューニングのためのサンプル LDIF を生成するには、次のツールを使用します。これらのツールは、相互運用性のために LDIF を変換、ソート、フィルタする目的にも使用します。

- `ldifxform`(1) コマンド: LDIF の変換、ソート、フィルタ
- `makeldif`(1) コマンド: サンプル LDIF の生成

サービスのチューニング
クライアントのディレクトリサービス利用状況の検証や、インデックス作成用の推奨値の生成には、`logconv`(1)コマンドを使用します。

選択により、ディレクトリサーバーと同じシステムまたは別のシステム上に Directory Server Resource Kit ツールをセットアップして実行できます。どちらの選択が適切かは作業環境によって異なります。また、配備のどの段階に到達しているかによっても選択が変わります。次に示す質問と回答は、Directory Server Resource Kit をどのシステムにインストールして利用するかの判断に役立ちます。

質問: 現在の作業の目的は、ディレクトリサービスを実際に開発する前にディレクトリ技術を評価または例証することですか。

回答: この場合は便宜性を優先して、ディレクトリと同じシステム上に Directory Server Resource Kit をインストールして利用します。

質問: 現在の作業の目的は、ディレクトリクライアントアプリケーションまたはプラグインを開発することですか。

回答: この場合は便宜性を優先して、ディレクトリと同じシステム上に Directory Server Resource Kit をインストールして利用します。

質問: 現在の作業の目的は、ディレクトリのパフォーマンス特性をテストすることですか。

回答: ディレクトリサービスを提供するシステム上で実行する必要がある唯一のコマンドは、システム固有のチューニング推奨値を生成する `idsktune` コマンドです。

回答: したがってこの場合は、測定対象のシステムへの影響を回避するために、ほかのシステムに Directory Server Resource Kit をインストールし、`idsktune` 以外のコマンドを実行します。

`authrate`、`modrate`、`searchrate` などのクライアントを独立したシステム上で実行することにより、ディレクトリパフォーマンスの正確な測定結果が得られます。測定対象のシステム上で動作するプロセスを注意深く制御することにより、測定精度を向上させることができます。ディレクトリに格納するサンプルデータを制御することによっても精度を向上させることができます。制御されたデータは `makeldif` を使用して生成できます。

質問: ディレクトリをデータセンターに配備済みですか。

回答: この場合は、配備済みシステムへの影響を回避するために、ほかのシステムに Directory Server Resource Kit をインストールして各種コマンドを実行します。

`logconv` による分析や、`ldifxform` による LDIF 変換などのその他の操作も外部のシステムから実行します。

Directory Server Resource Kit で修正されたバグ

この節では、このリリースで修正されたバグの一覧を示します。

次のバグが、Directory Server Resource Kit の前回のリリース以降に修正されました。

4536646 `searchrate` コマンドに、タイムアウトを指定するオプションがあるべきである。

4994437 `authrate` の使用法を修正する。

5005829 `searchrate` の使用法を修正する。

5005834 `modrate` の使用法を修正する。

5009664 `ldifxform` コマンドを`to=cs` とともに使用した場合、正しく変換されない。

5034829 `ldapsubtdel` コマンドで、ファイルからのパスワード読み取りを許可するべきである。

5082075 `authrate` コマンドで、バインドエラーを送信するべきである。

5082493 `dsmlsearch` コマンドで、LDAP フィルタ文字列構文を処理するべきである。

5083049 `dsmlmodify` の使用法を修正する。

5083952 Windows システムで `ldifxform` コマンドに `-c to=ascii` オプションを使用すると、クラッシュする。

5084253 `logconv -d` オプションがゼロ除算エラーを生成する。

Directory Server Resource Kit の既知の問題点と制限事項

この節では、リリース時点での既知の問題点および制限事項の一覧を示します。

5081543 `searchrate` は、Windows システムで複数のスレッドを使用するとクラッシュします。

5081546 `modrate` は、Windows システムで複数のスレッドを使用するとクラッシュします。

5081549 `authrate` は、Windows システムで複数のスレッドを使用するとクラッシュします。

5082507 `dsmlsearch` コマンドの `-D` オプションは、バインド DN ではなく HTTP ユーザー ID を取ります。

この問題点に対処するには、Directory Server 内の DN にマップされたユーザー ID を指定します。

6379087 NameFinder を Windows システム上の Application Server に配備できない現象が確認されています。

6393554 NameFinder が、配備のあとにエラーが見つからないページをスローする現象が確認されています。

この問題点に対処するには、`nsDSRK/nf` の名前を `nsDSRK/NF` に変更します。

6393586 NameFinder の「My Selections」リストには、2 名を超えるユーザーを追加できません。

6393596 NameFinder では、「LastName」、「FirstName」、「Email」、および「GivenName」以外のエントリ値を検索できません。

6393599 NameFinder では、グループの検索ができません。